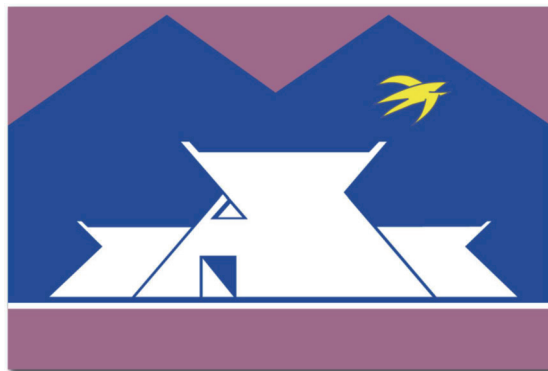


宮崎県埋蔵文化財センター

研 究 紀 要

第4集



2017年4月

宮崎県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、宮崎県埋蔵文化財センター職員および県内の埋蔵文化財関連部署に所属する職員の研究活動の一端を紹介し、広く情報発信することで各々の資質向上を図り、ひいては県民文化の向上に寄与することを目的として刊行するものである。
- 2 掲載されている論文等の内容や見解は執筆者個人に属するものであり、宮崎県教育委員会あるいは宮崎県埋蔵文化財センターの公式見解を示すものではない。
- 3 本書は Adobe 社製の Adobe InDesign CS6 で編集し、PDF 版で公開するものである。なお、原稿の作成等には Microsoft 社製の Microsoft Word 2010、Microsoft Excel 2010 および Adobe 社製の Adobe Illustrator CS6、Adobe Photoshop CS6 を使用している。

目 次

【研究ノート】

県内出土磨製石鏃の集成（1）	加藤 徹	1
----------------	------	---

【資料紹介】

生駒遺跡（旧称）出土条痕文土器の年代について	菅付和樹	29
------------------------	------	----

生駒遺跡出土条痕文土器の年代測定	遠部 慎・宮田佳樹	32
------------------	-----------	----

宮崎県内で出土した縄文時代晩期系浅鉢形土器の一例	吉本正典	39
--------------------------	------	----

異形鉄器小考—大窪第1遺跡出土の不明鉄器について—	和田理啓	42
---------------------------	------	----

県内出土磨製石鏃の集成（1）

加藤 徹

（宮崎県埋蔵文化財センター）

はじめに

筆者は平成25～27年度にかけて、都城市に所在する大年遺跡の発掘調査、整理作業および報告書作成を担当した。その中で竪穴建物跡7（調査時の略称および注記名は「S12」）の埋土中から、鏃身部に根挟装着用と思われる凹みを作り出した特徴的な形態を有する磨製石鏃が出土した。建物跡の時期は古墳時代後期のものであり、かつ石鏃も床面から高い検出面付近の出土であることから、建物跡に伴うものではないと判断したことから、報告書では詳しく検討を行わなかった。しかし、特徴的な形態であることや、主に県南から鹿児島県にかけての地域で出土してよく知られることから、時期的・地域的特徴として抽出できる可能性がある。

ところで、県内における弥生時代研究は低調であり、その文化的な様相は未だ明らかでない部分も多く、管見の限り磨製石鏃に関する論考もほとんどないようである。そこで本稿では、まずは県内出土の磨製石鏃を集成することにより、基礎資料を作成することを目的とした。

なお、筆者の怠慢と能力的な問題から、今回は当センターが報告書を刊行している遺跡を対象として集成を行った。県内各市町村が行った調査で出土している磨製石鏃の集成については、稿を改めて行うこととする。

当センター関連遺跡出土磨製石鏃の様相

（1）出土遺跡の分布

当センターがこれまでに刊行した報告書において、磨製石鏃が出土した遺跡として抽出することができた数は45遺跡で、その点数はおよそ450点である。見落としている資料や未報告の資料が存在する可能性があるため、実際にはまだ多いものと思われる。

これらの磨製石鏃が出土した遺跡の分布をみると、図1のようにその範囲は高千穂町周辺、延岡市～日向市付近、都農町～宮崎市周辺、都城市周辺に大きく分けることができる。繰り返しになるが、今回は当センターが行った遺跡に限定しているため、磨製石鏃が出土した遺跡には偏りがある可能性はある。特に県央部の遺跡は、東九州自動車道関連で調査した遺跡で占められている。これらの磨製石鏃が出土している遺跡では、1遺跡あたり数点の出土数となっているものが多いが、いくつかの遺跡では数十点におよぶ石鏃が出土している遺跡もある。特に県北部の高千穂町周辺の地域ではその傾向が強いように思われる。

これらの磨製石鏃についてその帰属時期をみると、中期後半以降のものが増えており、弥生時代前半期に該当するものはほとんどない。その中でも、中期後半～後期前半頃と思われる石鏃が多いようである。しかし、包含層からの出土が比較的多く、時期が不明確な傾向にある。竪穴建物跡からの出土も一定量存在するが、床面あるいは埋土中のどのレベルかなど、遺構に伴うかどうかの判断ができないものもある。⁽¹⁾したがって、今回取りあげた資料の中にも、遺構に伴っていないものがある可能性がある点には注意が必要である。本来は各時期に分けて細かく検討すべきであるが、このような問題点を含むこともあり、この点については今後改めて検討することにして、本稿では弥生時代後半期のものということでのおおよその特徴として考えてみることに

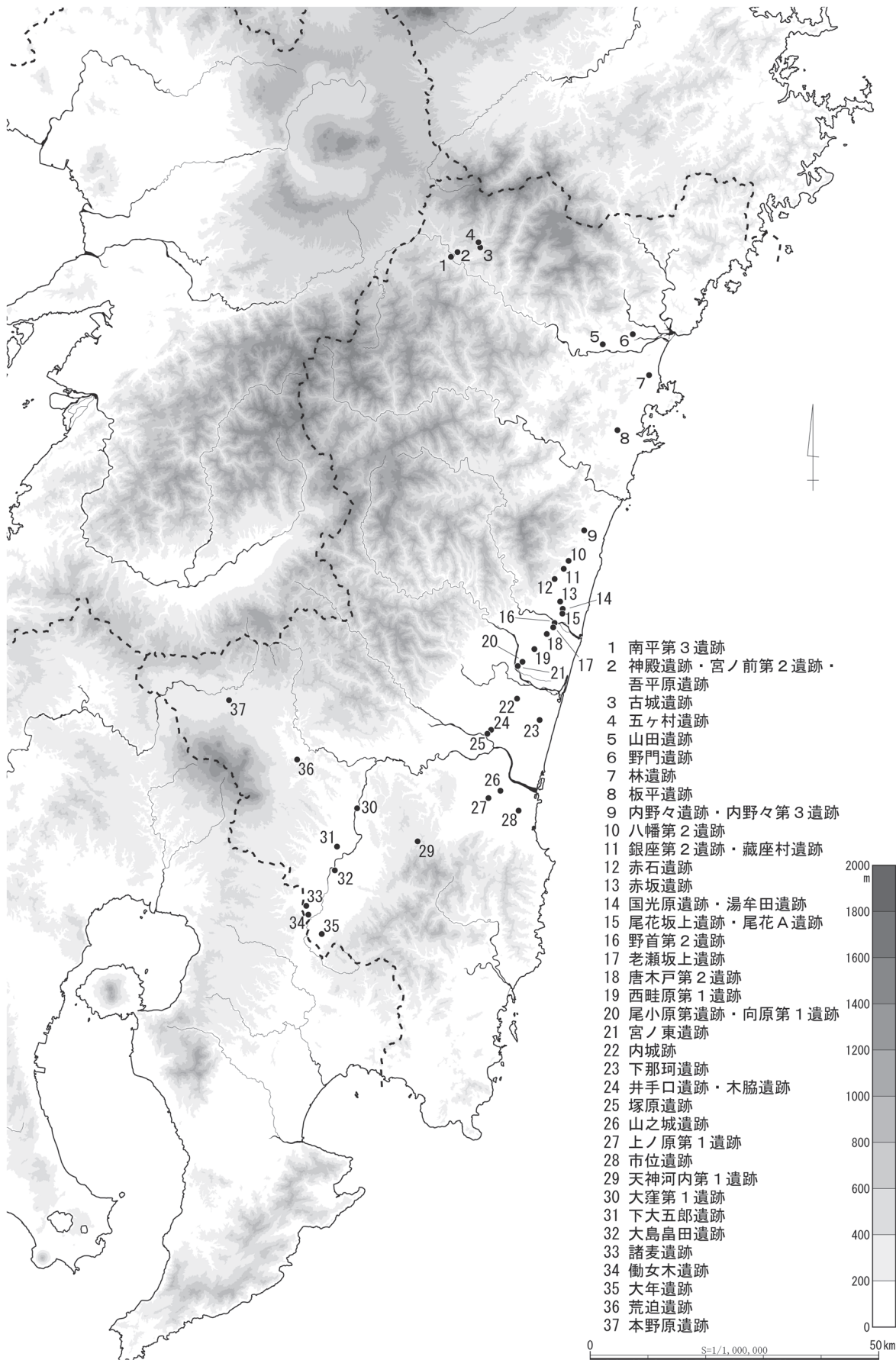


図1 磨製石鏃出土遺跡分布図 (S=1,000,000)

する。

（2）形態（大きさ）

各遺跡の磨製石鏃（集成資料図1～9）をみると、高千穂町周辺の遺跡については、一見して細身のものが多いことに気づく。基部形態、研磨の仕方などの細部については、1遺跡内においてもバリエーションが存在するようであるが、全体的に細身の形態が多い。このような視点で、県南地域の石鏃をみると、同様に細部形態では異なるものの、長さに対して幅が広めの形態が多いように感じられる。このような状況から、磨製石鏃の製作に関して、細部形態とはまた異なる、長さとの比率に関する何らかの規範が存在する可能性が考えられる。紙幅の都合もあり、ここではこの長さとの幅にしばって、若干の検討を行うことにしたい。

県北地域の様相

主に日向市以北の地域であるが、数量的な中心は高千穂町付近の内陸部にある。

各遺跡で出土している磨製石鏃の形態をみると、既述のように、幅に対して長さが長いものが全体的に多い。これを数値でみると、当該地域出土のものは幅1.0～2.0cmの範囲に集中している（図2）。一方、長さについては、各遺跡で2.0～6.0cmの範囲に広がっている。このように長幅比が一定になることよりも、一定の幅の範囲内で長さを変えている傾向があり、幅に対する規制が存在した可能性がある。幅がある程度一定なのに対して、長さについてはバラツキが大きいこと、その長幅比に対する重量の関係（図5・6）では、分布範囲にまとまりがみられない点の特徴である。その中で吾平原遺跡では長幅比が、古城遺跡では重量に比較的まとまりが認められ、同じ地域の中でも各遺跡で若干様相を異にしている。

平面形では、最大幅が身部の途中にあるものがあり、角を持たない五角形状を呈するものが目立つ。ところで、神殿遺跡で出土しているような基部が再び狭くなる形態は、県内の他地域ではあまりみられない特徴的な形態である。ただし、各遺跡で形態の組成が異なっており、時期的な変化⁽²⁾、あるいは他地域からもたらされた石鏃が一定数存在する可能性が考えられる。このような非在地的な形態の一つとして、野門遺跡において出土している有茎式の磨製石鏃（集成資料図4-190）をあげることができる。

このほか、身部の横断面形状をみると、鑄造り状に菱形を呈する範囲が広いが、基部付近に平面で三角形状、横断面形で平造り状の狭い平坦面を作り出しているものが多いようである。

県央地域の様相

都農町～宮崎市周辺の沿岸部地域が中心で、遺跡は主に東九州自動車道関連で調査が行われたものが多い。したがって、遺跡の分布が線的になっている。

遺跡の地理的な分布範囲が広いこともあるためか、大きさを数値でみた場合にもその分布範囲も広がっている（図2・3）。しかし、各地域を総合的にみた場合には、県北地域と県南地域の間付近を中心としながらその周辺に広く分布している。この点では、地理的な関係と同じく、大きさ的にも両地域の中間的な状況とみることができる。大きさを遺跡別にみると、幅1.0～3.0cm、長2.0～4.0cmの範囲におよそ収まる傾向にあり、県北のような幅に対する意識というものとはそれほど強くは感じられない。ただし、尾花A遺跡では幅が1.0～2.0cmに収まるものが多く、やや幅を意識した状況となっているのに対して、下那珂遺跡では幅が1.0～3.0cmまでと分布範囲が広く、幅に対する意識は低くなっているように、遺跡によつて差異が認められる。下那珂遺跡の場合、長さとの幅が比例するような分布をしており、後述する県南地域の状況に近いといえる。

形態をみると、県央地域はバラエティーに富んでいる。全体的には三角形に近い形状のものが

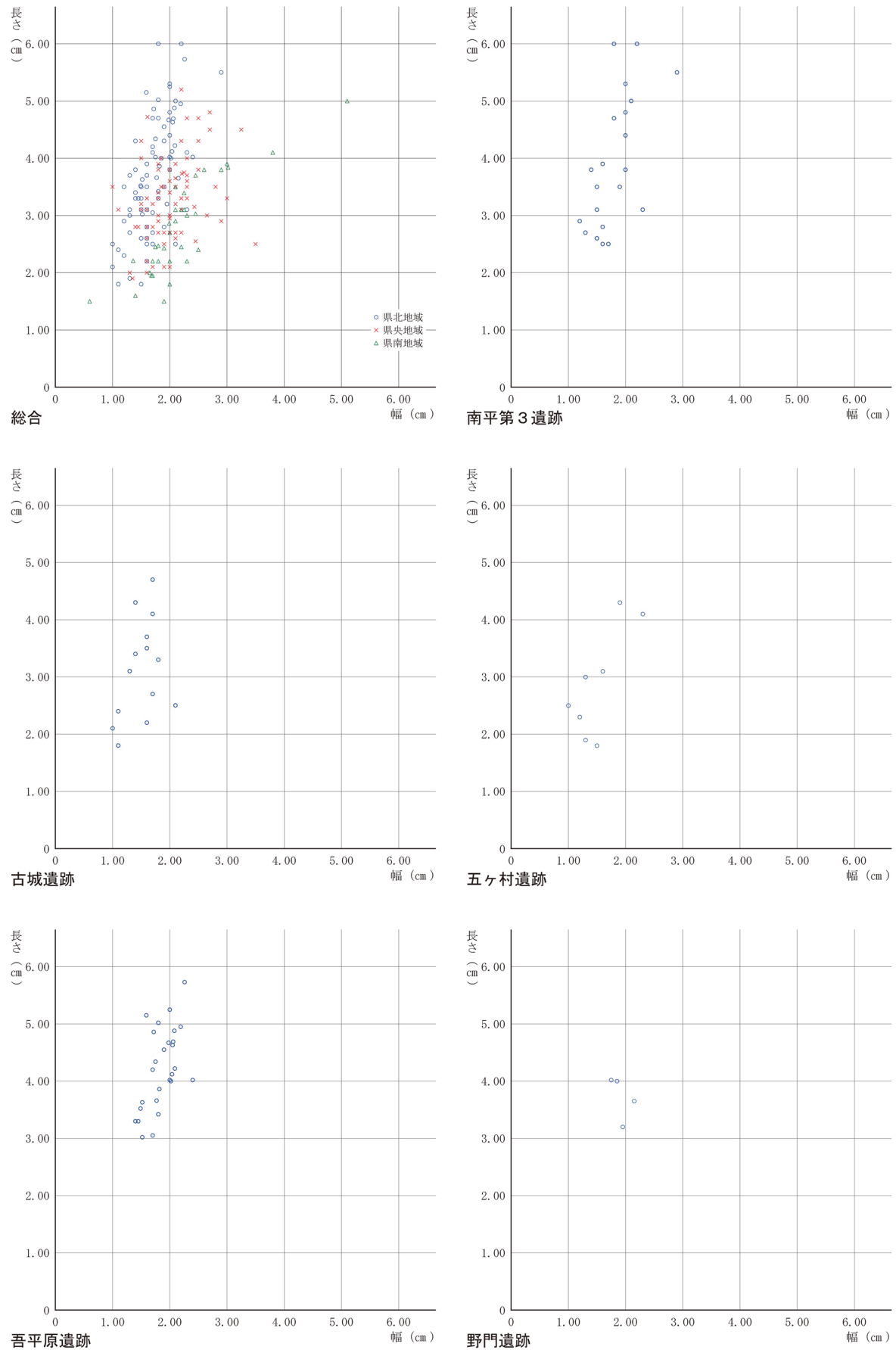


図2 磨製石鏃の大きさによる散布図1

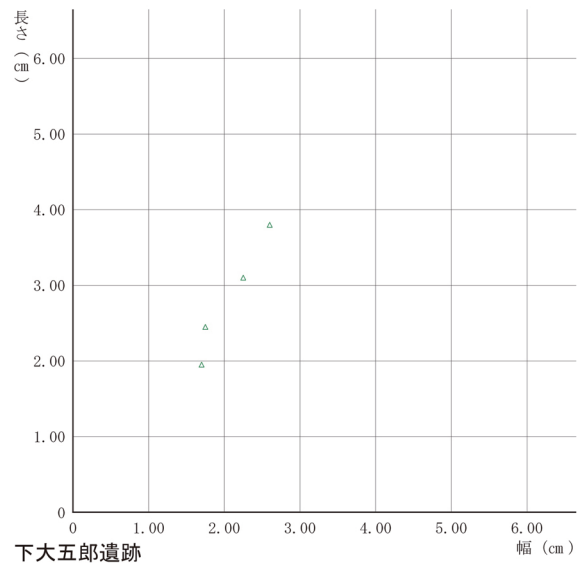
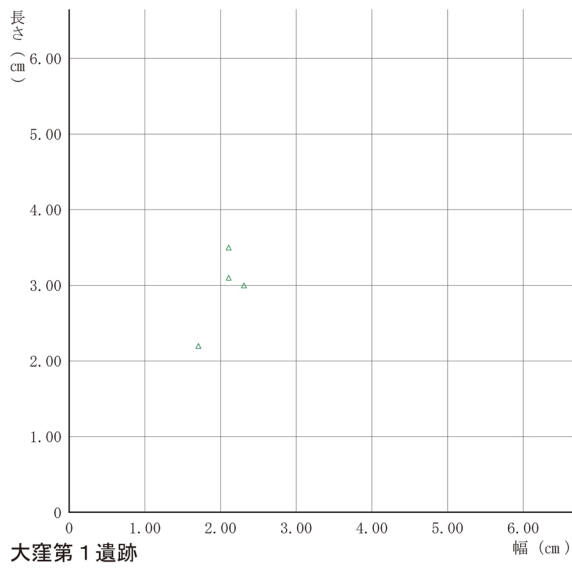
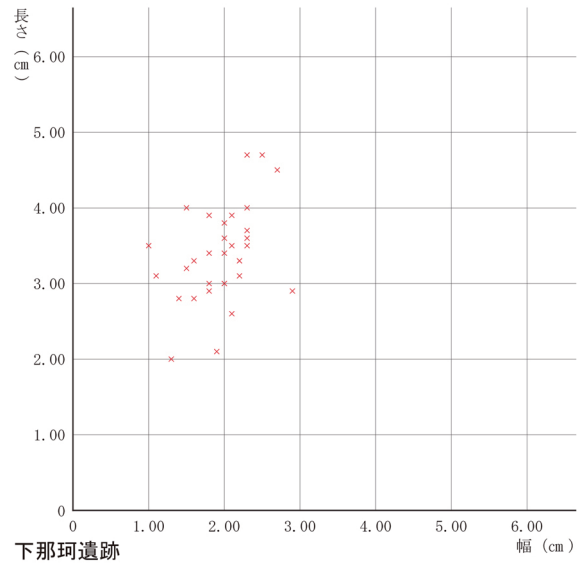
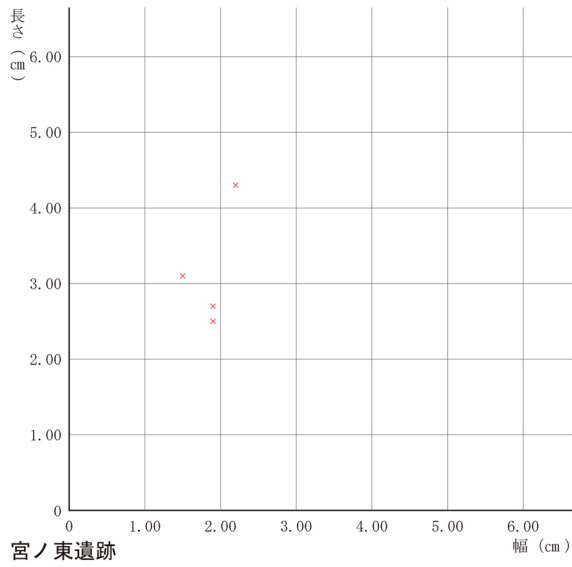
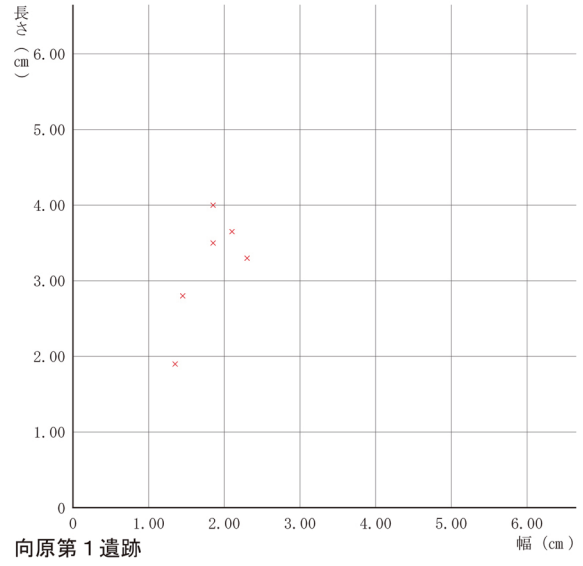
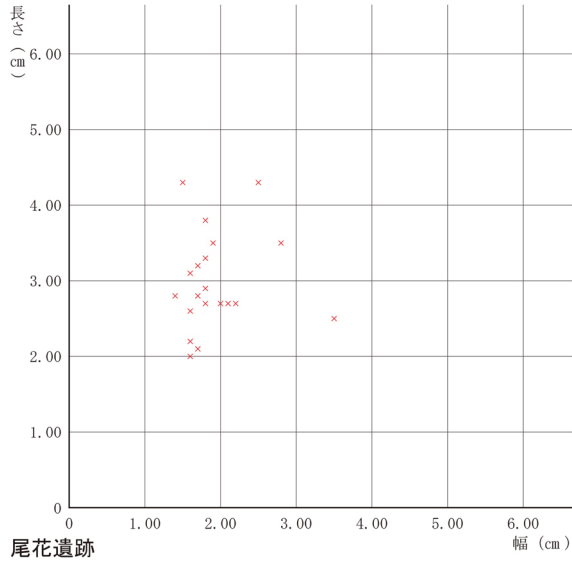


図3 磨製石鏃の大きさによる散布図2

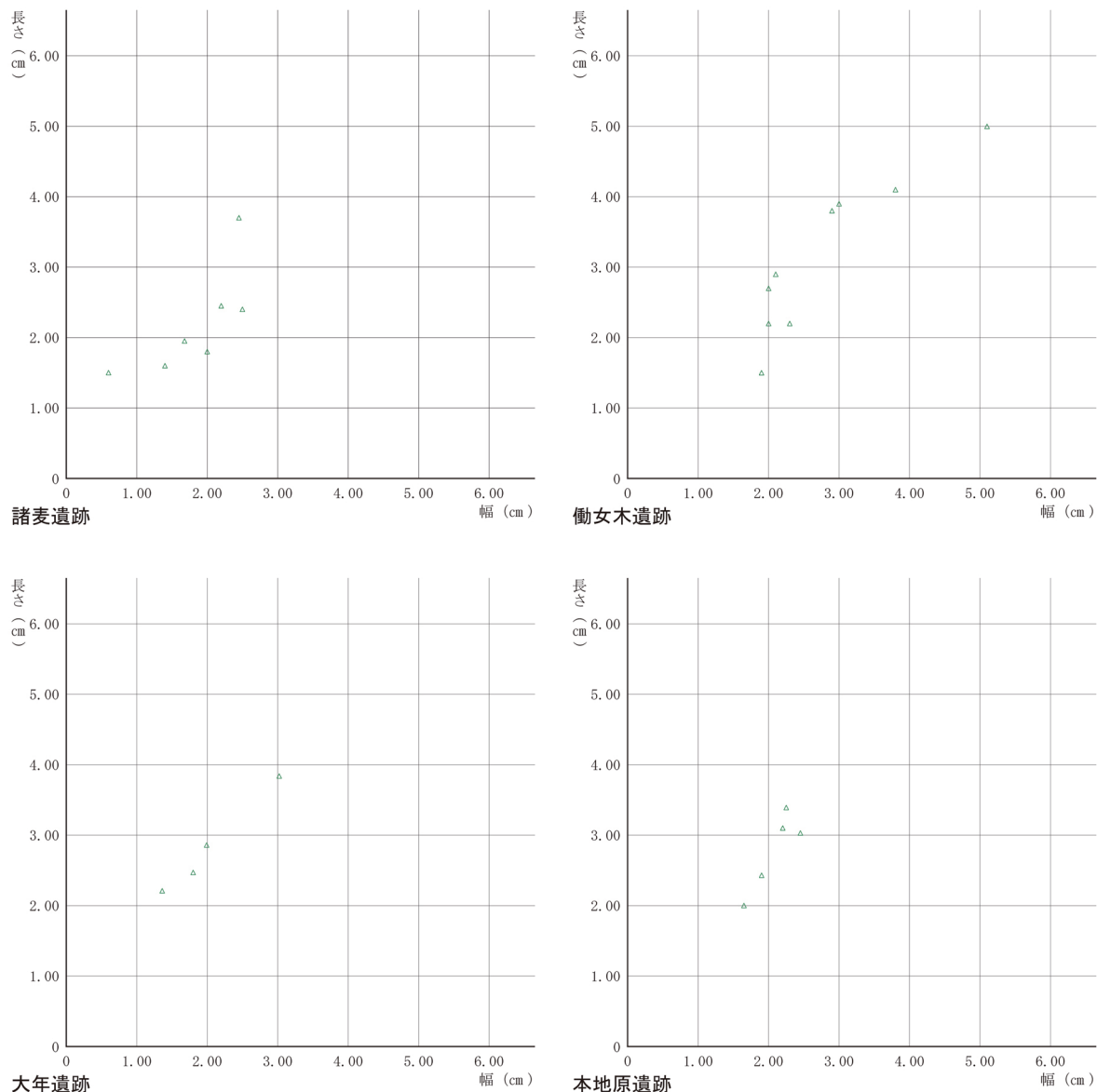


図4 磨製石鏃の大きさによる散布図3

多いが、尾花A遺跡や下那珂遺跡では、県北地域に特徴的な最大幅が鋒側にあるもの（集成資料図5-237・集成資料図7-352・353など）も出土している。尾花A遺跡では中九州地方に特徴的な基部を折り返した有袋鉄斧が、下那珂遺跡では県内では稀な鏡片が出土しているように他地域との交流をうかがわせる資料が出土している。このような磨製石鏃の形態からは、県北内陸部との交流があったことを想定することができる。

身部の横断面形状では、県北地域とは異なり、鎚造り状の断面菱形を呈するものは少なく、平造り状を呈するものがほとんどである。さらに、大年遺跡でみた身部に根挟み状の凹みを作り出したものがみられるようになる。特に下那珂遺跡ではその数が多い。このような身部に凹みを有する磨製石鏃の平面形は、基部の幅が広めで中央が浅く凹む類似した形態のものが多いようで、定形的な形態として認識されていた可能性がある。その一方で、基部（脚部）下端が尖るもののほか、意図的に平坦に研磨したものもみられるといったバリエーションが存在するなど、さらに細分が可能である。雰囲気的には銅鏃に近いようにも感じられるため、これらをモデルにしている可能性も考えられる。このような形態をもつものは、やはり後期後半～終末期頃の遺跡から出

土することが多いようである。⁽³⁾ この形態の磨製石鏃は、県南地域に多いと予想していた形態であるが、今回集成した資料の範囲では県央地域の方が数的に多くなっている。個人的には間仕切付建物跡の分布圏と重なるのではないかと考えているため、市町村調査分での増加を期待したいところである。

県南地域の様相

都城市を中心として、数は少ないがえびの市域までみられるように、主に内陸部の遺跡からの出土が多い。沿岸部は調査数が少ないこともあり、今回磨製石鏃の出土は確認できなかった。

磨製石鏃の大きさ的には、図2～4にみるように、県北地域と排他的な範囲に分布が認められ、幅が広めとなっており、幅2.0cm付近に多く分布している。また、散布図上で直線的に分布しているように、長さとの幅が比例しているものが多く。この事から、県北地域とは異なり、主に長幅比を意識していることをうかがうことができる。これは長幅比と重量の関係（図5・7）にも表れており、重量の分布範囲が広いのに対して、長幅比の分布範囲は狭く、各遺跡で近い傾向がみられる。しかし、細かくみると、長幅比が1.0付近に集まる遺跡、2.0に集まる遺跡、1.0～2.0の間に集まる遺跡などが存在しており、遺跡別に若干の差異がみられる。

形態的には、平面形が三角形状を呈するものが多い。また、横断面形では県央地域と同様に、平造り状の断面を呈するものがほとんどである。当該地域には身部に根挟み装着用と思われる凹みを有する形態が多いと予想していたが、既述のように、今回取りあげた資料ではほとんどみられない。大年遺跡の報告でも触れたように、当該形態の磨製石鏃は後期後半～終末期頃に出現する可能性があるが、働女木遺跡をはじめとする今回集成した県南地域の資料の多くが中期後半～後期初頭頃のものであるため、含まれていないものと解釈しておきたい。

（3）形態的差異について

以上、大きさを中心にして、その他平面形態と身部横断面形について概観してきた。基部の形態や整形の仕方などの細かな点については、ここで検討する余裕がないため、別稿にゆずり、ここでは簡単に今後の分類指標になるとと思われる要素についてみておくこととする。

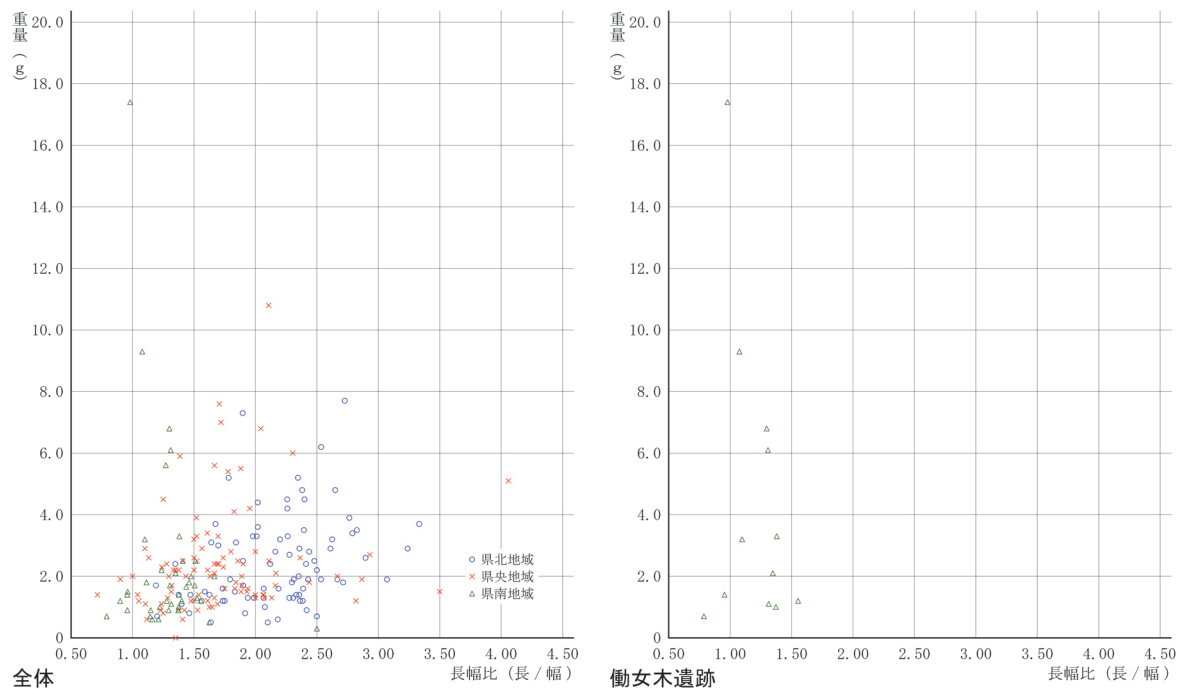


図5 磨製石鏃の長幅比 - 重量による散布図1

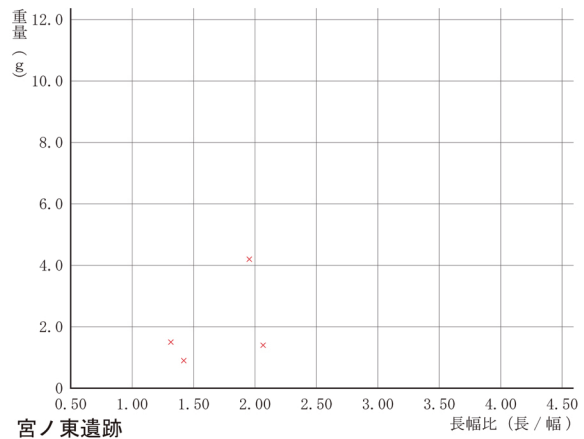
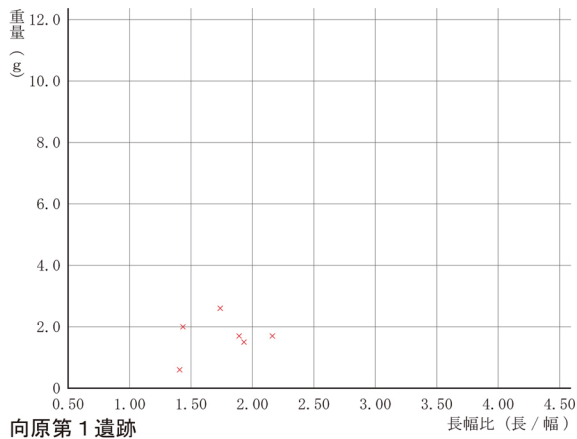
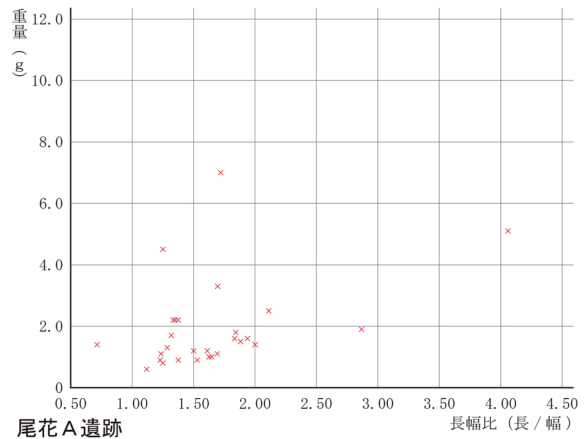
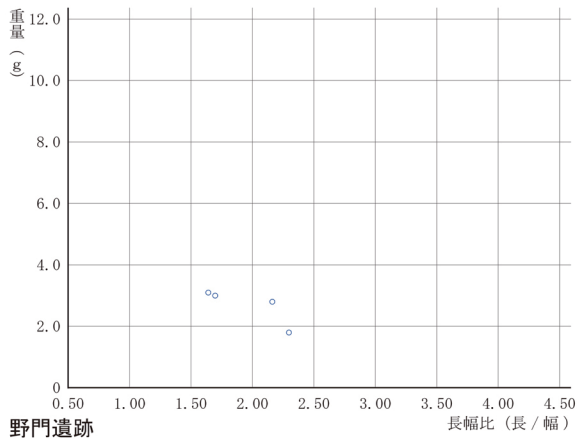
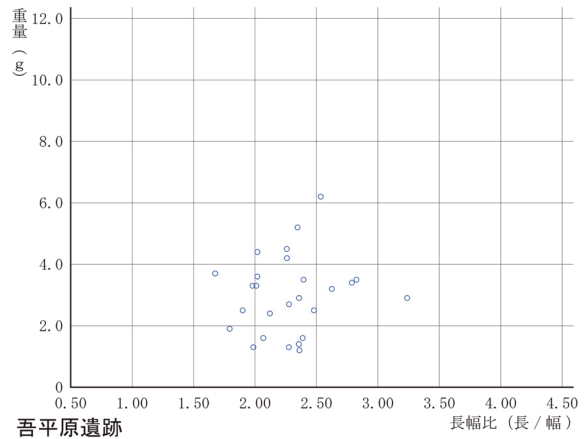
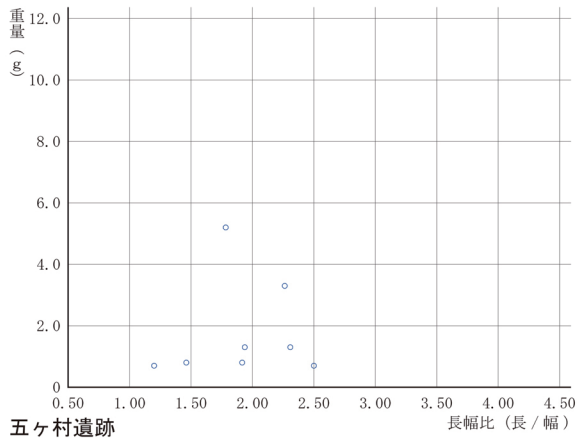
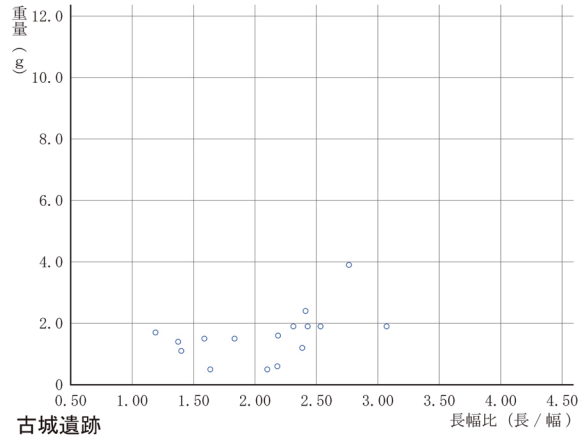
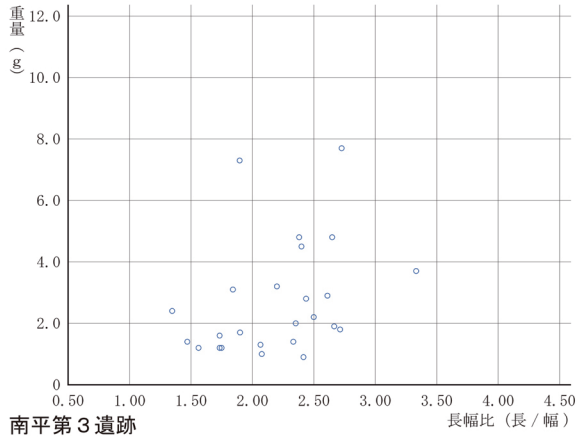


図6 磨製石鏃の長幅比 - 重量による散布図2

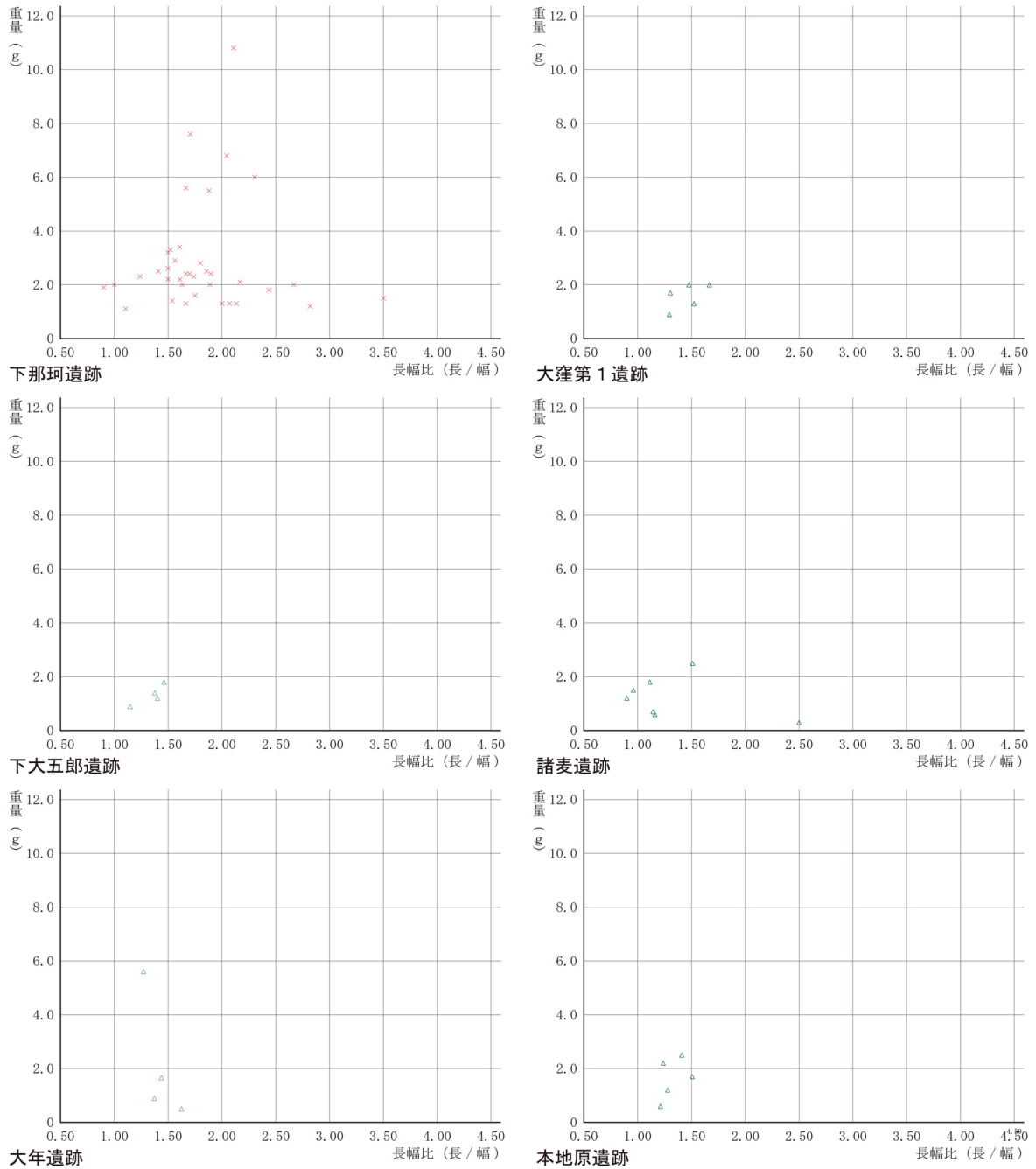


図7 磨製石鏃の長幅比 - 重量による散布図3

細部形態で分類可能な点としては、基部形態をあげることができる。基部形態には、平基、わずかに凹むもの、凹基があり、有茎式はほとんどみられない。素材となる剥片の形状も影響していると思われるが、多くの場合、基部の下端面も研磨しているため、基部形状も製作者の意図を反映していると考えられる。このほか、基部の下端面の研磨の仕方にも数パターンがみられるようであるが、残念ながら報告書に掲載されている実測図では表現されることがほとんどない。この点については、今後実見しながら検討を進めていきたい。さらに、これらの基部形態は、研磨の仕方とともに、使用する砥石の形状も影響していることが考えられる。そのため、磨製石鏃が出土している遺跡内でどのような砥石が使用されているのかも検討項目の一つとしてあげることができよう。

基部形態と並んで、刃部形態についても細分の対象となりえる。しかし、直線的・弧状などは明瞭に区分することが難しいが、土器における最大胴部径の位置よろしく、身の長さにおける最大幅の位置などによって、刃部形状を数値的に表現できる可能性がある。

以上の他には、今回少し触れたが、身部の横断面形状も分類の指標となりえる。これも整形の仕方と強く関係しており、大きくは鑄造り状と平造り状のものがあるが、平坦部の範囲や整形の仕方などからさらに細分が可能であろう。

今後は、このような点を検討項目として追加しながら分類を行っていきたい。

まとめ

以上、簡単に当センターが調査した遺跡から出土した磨製石鏃について、集成とともに大まかな様相について述べてきた。磨製石鏃の製作にあたっては、大きさの点から、県北地域では幅、県南地域では長幅比を強く意識していた可能性があることがわかった。県央地域については、両者の中間的な状況が想定される。結果として、県北では細身の形態が、県南地域では幅広の形態が多い特徴を指摘することができた。一方、同じ地域内でも遺跡別に傾向が若干異なるため、地域内においても各集落において重視する大きさが異なっていた可能性も考えることができる。ただし、これは時期的な違いである可能性もある点では注意が必要である。

大きさに加えて、身部の横断面形についても若干の検討を行った。今回集成を行った範囲では、県北部では身部の平坦面が狭く、鑄造り状の断面菱形態を呈するものが多く、県央・県南地域では平坦面が広い平造り状のものが多い傾向があることを指摘することができた。また、身部に根挟み装着用と思われる凹みを作り出すものについては、県央地域で広く確認ができた。一方、当初この形態が多いと予想した県南地域ではほとんど確認できなかった。その背景には、今回集成した県南地域の遺跡が中期後半～後期初頭という、当該形態が出現するよりも時期的にやや古い遺跡が多かったことが要因として考えられる。県央地域で一足早く出現している可能性もあるが、これについては今後集成をしていく過程で明らかになるものと思われる。

以上のような各地域における特徴を指摘したが、これに基づくと、他地域からもたらされた石鏃を推定することもできる。たとえば、県北では幅広で平造り状のものが、県央・県南では細身で鑄造り状のものがあれば、それは在地品ではない可能性が考えられる。この点については、製作技法と合わせて観察を行う事で、型式分類を行ない明らかにしていくことが今後の課題である。また、重要な課題として、磨製石鏃から鉄鏃へといつ交代したのかという問題がある。県内における弥生時代の鉄器の様相をみると、鉄鏃は少数ながらも存在しているものの、広く普及するのは後期以降である。また、鉄鏃以外の鉄器については、他地域ではいち早く定着する鉄斧などの工具類でさえ、弥生時代の終わり頃になっても一部の地域でしか普及しない。さらに鉄器に加えて、同じ金属器である青銅器については、鉄器以上に普及しておらず、その出土数は極めて少ない。このような現段階の状況では、県内における弥生時代の社会では、単純に金属器を所有していなかったというよりも、金属器に対する忌避意識が存在していたと解釈した方が良いであろう。弥生時代の終わり頃になって創出されたと考えられる新たな型式の石鏃の存在は、鉄鏃や銅鏃などに対抗する意識があったのではないかと考えられる。このように磨製石鏃の様相を追うことによって、県内における古墳文化の受容の仕方について知る一つの手がかりにもなるのではないと考えられる。

註

- (1) この点については、詳細に検討を行っていないが、当センターが調査を行った報告書においては、遺構内のどのレベルから出土しているかの記載があるものは少ないように思われる。
- (2) 平成27～28年度にかけて調査を行った平底第2遺跡（日之影町）では、弥生時代前期～中期頃のものと思われる磨製石鏃がいくつか出土しているが、その形態は細身のものはみられなかったように思われる。したがって、弥生時代の後期頃から地域性が顕在化する可能性がある。
- (3) 尾小原遺跡において、埋土から中期後半～後期初頭頃と思われる壺の付近から出土しているようであるが、報告書記載の内容では判断が難しい。断面図の土層3は流入土のようにみえるが、報告書の記載ではそれよりも新しい土層2が貼床と考えられているようであり、筆者としては理解に苦しむ。加えて、石鏃の出土レベルが不明な点も遺構にともなうものどうかの判断を難しくしている。

報告書一覧

- 宮崎県教育委員会 1991『天神河内第1遺跡』、宮崎県教育委員会。
- 宮崎県教育庁文化課 1993『吾平原第2遺跡・宮ノ前第2遺跡・城ノ平遺跡』、宮崎県教育委員会。
- 宮崎県教育委員会 1994『本地原遺跡』、宮崎県教育委員会。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1997『広木野遺跡・神殿遺跡A地区』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1998『市位遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第10集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1998『荒迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999『神殿遺跡B・C地区・南平第3遺跡・南平第4遺跡・中ノ原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001年『木脇遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第43集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001年『松元遺跡・井手口遺跡・塚原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第44集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002年『内城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第51集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002年『藏座村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第53集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『白ヶ野第2・第3遺跡 上の原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『阿蘇原上遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第71集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『布片遺跡 古城遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第74集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『五ヶ村遺跡 大野原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『西畦原第1遺跡 西畦原第2遺跡（鬼界アカホヤ火山灰層上面）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第82集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第90集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『唐木戸第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第100集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『尾花坂上遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第101集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『下大五郎遺跡 谷ノ口遺跡 渡り口遺跡 下川原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『銀座第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第115集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『尾小原遺跡（二次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第117集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『老瀬坂上第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第118集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『向原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第119集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『野門遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第136集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『山田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『八幡第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第148集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『国光原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第149集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『赤坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第151集。

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『湯牟田遺跡(二次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第152集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『諸麦遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第168集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『山之城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第171集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『野首第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第172集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『宮ノ東遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第173集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『林遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第174集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『板平遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第176集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『大島畠田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第178集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009『住吉B遺跡 赤石遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第184集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『尾花A遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第195集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『内野々遺跡 内野々第2・第3遺跡 内野々第4遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第202集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『働女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第205集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016『大年遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第237集。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016『大窪第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第238集。

磨製石鏃集成資料一覧表(各項目は報告書記載を基にしている)

遺跡名	出土遺構等	時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	長幅 比	重量 (g)	石材	報告書 掲載番号	文献
南平第3遺跡	3号住居	中期末～後期前葉?	4.20+ α	1.80	0.40		3.4	頁岩	図11-97	県埋文17集
	4号住居	後期前葉?	4.00+ α	1.70	0.20	2.35	2.0	頁岩	図12-109	
			3.90	1.60	0.30	2.44	2.8	頁岩	図16-140	
	7号住居	後期前葉?	3.40+ α	1.70	0.30		1.9	珪質粘板岩	図16-141	
			3.80	2.00	0.20	1.90	1.7	頁岩	図16-142	
			2.50+ α	1.80	0.30		1.5	頁岩	図16-143	
	8号住居	?	3.50	1.90	0.40	1.84	3.1	頁岩	図17-150	
	9号住居	中期後半?	6.00	2.20	0.40	2.73	7.7	頁岩	図18-157	
		中期後半?	3.10+ α	1.60	0.30		1.8	頁岩	図18-158	
			6.00	1.80	0.30	3.33	3.7	赤紫色頁岩	図20-168	
	10号住居	中期後半?	4.80	2.00	0.30	2.40	4.5	頁岩	図20-169	
			5.00	2.10	0.40	2.38	4.8	頁岩	図20-170	
	12号住居	中期後半?	5.50	2.90	0.40	1.90	7.3	頁岩	図23-181	
	16号住居	?	4.70	1.80	0.30	2.61	2.9	流紋岩	図27-189	
			2.80	1.60	0.20	1.75	1.2	頁岩	図29-208	
	17号住居	後期後半?	3.90+ α	1.70	0.20		2.2	珪質粘板岩	図29-209	
			4.40	2.00	0.40	2.20	3.2	頁岩	図29-210	
			5.50+ α	1.80+ α	0.30		3.7	珪質粘板岩	図29-211	
	18号住居	中期末～後期前葉?	3.20+ α	1.70+ α	0.30		1.3	頁岩	図32-247	
			4.00+ α	1.50+ α	0.30	2.67	1.9	頁岩	図32-248	
			2.60	1.50	0.20	1.73	1.2	頁岩	図32-249	
	19号住居	中期末～後期前葉?	2.60	1.50	0.30	1.73	1.6	頁岩	図35-259	
			4.00+ α	1.60	0.40	2.50	2.2	流紋岩	図35-260	
			5.60+ α	2.00	0.40		5.1	珪質粘板岩	図35-261	
	22号住居	後期?	4.00+ α	2.60	0.30		3.8	流紋岩	図39-293	
	23号住居	後期前半?	3.10	1.50	0.20	2.07	1.3	珪質粘板岩	図39-301	
			2.60+ α	1.70	0.30		1.5	流紋岩	図39-302	
	24号住居	中期末～後期前葉?	2.90	1.20	0.20	2.42	0.9	流紋岩	図40-311	
	25号住居	中期末～後期前葉?	3.50	1.50	0.20	2.33	1.4	珪質粘板岩	図42-320	
			3.90+ α	1.70	0.30		2.6	珪質粘板岩	図42-321	
		5.30	2.00	0.40	2.65	4.8	頁岩	図44-362		
		3.80	1.40	0.20	2.71	1.8	珪質粘板岩	図44-363		
		3.10+ α	1.30	0.30		1.7	珪質粘板岩	図44-364		
		2.80+ α	2.20	0.20		1.8	頁岩	図44-365		
		3.10	2.30	0.30	1.35	2.4	頁岩	図44-366		
包含層	中期末～後期後半?	2.70+ α	3.00	0.30		3.2	珪質粘板岩	図44-367		
		1.30+ α	1.30	0.20		0.5	流紋岩	図44-368		
		2.70	1.30	0.30	2.08	1.0	流紋岩	図44-369		
		2.50	1.70	0.20	1.47	1.4	頁岩	図44-370		
		3.20+ α	2.00	0.40		2.4	頁岩	図44-371		
		2.50	1.60	0.20	1.56	1.2	珪質粘板岩	図44-372		
		3.90+ α	1.50	0.30		1.7	結晶片岩	図44-373		
神殿遺跡A地区	SA10	終末期?	4.20+ α	1.45	0.25	2.90	2.6	頁岩	図23-73	県埋文7集
	包含層	後期?	3.90	1.60	0.29	2.44	?	頁岩(粘板岩)	図25-87	
神殿遺跡B地区	包含層	包含層?	3.70	1.30	0.35	?	?	?	図11-96	県埋文17集
宮ノ前遺跡	10号住居	後期前半	3.50	1.20	0.20	2.92	?	緑泥片岩	-	県教委1993
			2.50+ α	1.20	0.20		?	緑泥片岩	図23-2	
	11号住居	古墳後期	4.20+ α	2.00	0.30		?	?	図23-3	
			2.35+ α	1.70	0.35		?	?	図23-4	
			1.35+ α	1.40	0.30		?	?	図23-5	
	13号住居	後期後半	3.30	1.50	0.40	2.20	?	頁岩	図23-6	
			2.90+ α	1.60+ α	0.30		?	頁岩	図23-7	
			2.80	1.90	0.30	1.47	?	?	図23-8	
	15号住居	古墳後期	2.95+ α	1.40	0.20		?	?	図23-9	
			2.60+ α	1.50	0.25		?	?	図23-10	
吾平原第2遺跡			6.20+ α	1.65	0.33		3.7	黒色頁岩	図5-1	県教委1993
			5.73	2.26	0.42	2.54	6.2	灰色頁岩	図5-2	
			5.33+ α	2.21	0.37		5.4	黒色頁岩	図5-3	
			5.25	2.00	0.29	2.63	3.2	黒色頁岩	図5-4	
			4.95+ α	1.65	0.30		3.3	黒色頁岩	図5-5	
			5.10+ α	2.10	0.30		4.4	灰色頁岩	図5-6	
			5.08+ α	1.90	0.35		3.8	灰色頁岩	図5-7	
			5.15	1.59	0.35	3.24	2.9	灰色頁岩	図5-8	
			5.02	1.80	0.29	2.79	3.4	緑色頁岩	図5-9	
			4.86	1.72	0.37	2.83	3.5	黒色頁岩	図5-10	

			4.88	2.08	0.37	2.35	5.2	赤色頁岩	図5-11	
			4.95	2.19	0.40	2.26	4.2	赤色頁岩	図5-12	
			4.92+ α	2.32	0.45		4.4	黒色頁岩	図5-13	
			4.68+ α	2.15	0.41		5.0	灰色頁岩	図5-14	
			4.67	1.98	0.20	2.36	2.9	黒色頁岩	図5-15	
			4.69	2.06	0.28	2.28	2.7	黒色頁岩	図5-16	
			4.63	2.05	0.42	2.26	4.5	灰色頁岩	図5-17	
			4.40+ α	1.80	0.35		3.1	緑色頁岩	図5-18	
			4.55	1.90	0.35	2.39	3.5	灰色頁岩	図5-19	
			4.40+ α	1.75	0.40		3.2	黒色頁岩	図5-20	
			4.20	1.70	0.29		2.4	黒色(頁岩)	図5-21	
			4.34	1.75	0.27	2.48	2.5	黒色頁岩	図5-22	
			4.12	2.04	0.40	2.02	4.4	灰色頁岩	図5-23	
			4.02	2.40	0.30	1.68	3.7	流紋岩	図5-24	
			4.22	2.09	0.30	2.02	3.6	灰色頁岩	図5-25	
			4.20+ α	1.50	0.30		2.3	黒色頁岩	図5-26	
			4.00	2.02	0.40	1.98	3.3	赤色頁岩	図5-27	
			3.86	1.82	0.29	2.12	2.4	灰色頁岩	図5-28	
			4.02	2.00	0.30	2.01	3.3	黒色頁岩	図5-29	
吾平原第2遺跡	包含層	?	3.85+ α	1.88	0.19		2.1	灰色頁岩	図5-30	県教委1993
			3.86+ α	1.94	0.28		2.4	黒色頁岩	図5-31	
			3.66	1.77	0.20	2.07	1.6	黒色頁岩	図5-32	
			3.30	1.45	0.20	2.28	1.3	黒色頁岩	図5-33	
			3.50+ α	1.55	0.39		1.7	黒色頁岩	図5-34	
			3.68+ α	1.77	0.26		1.7	灰色頁岩	図5-35	
			3.63	1.52	0.28	2.39	1.6	緑色頁岩	図5-36	
			3.52	1.49	0.22	2.36	1.2	黒色頁岩	図5-37	
			3.43+ α	1.41	0.34		1.8	黒色頁岩	図5-38	
			3.30	1.40	0.30	2.36	1.4	赤色頁岩	図5-39	
			3.42	1.80	0.30	1.90	2.5	灰色頁岩	図5-40	
			3.37+ α	1.69	0.27		1.8	赤色頁岩	図5-41	
			3.30+ α	1.65	0.25		2.0	灰色頁岩	図5-42	
			3.34+ α	1.45	0.28		1.4	黒色頁岩	図5-43	
			3.31+ α	1.39	0.25		1.5	黒色頁岩	図5-44	
			3.18+ α	1.66	0.21		1.7	黒色頁岩	図5-45	
			3.05	1.70	0.40	1.79	1.9	灰色頁岩	図5-46	
			3.10+ α	1.50	0.25		1.5	灰色頁岩	図5-47	
			3.02	1.52	0.24	1.99	1.3	黒色頁岩	図5-48	
			3.93+ α	1.68	0.27		1.5	灰色頁岩	図5-49	
	SA4	中期末～古墳前期?	3.00+ α	1.90	0.20		1.8	緑泥片岩	図48-35	
			3.20+ α	1.70	0.30		2.3	緑泥片岩	図48-37	
			4.30+ α	1.90	0.30		2.4	頁岩	図48-3	
			4.10	1.70	0.30	2.41	2.4	緑泥片岩	図48-5	
			3.70	1.60	0.30	2.31	1.9	緑泥片岩	図48-17	
			0.90+ α	1.00+ α	0.10		0.3	緑泥片岩	図48-19	
	SA6	中期末～後期初頭	2.20+ α	1.50	0.30		1.0	緑泥片岩	図48-24	
			1.70+ α	1.70+ α	0.30		0.8	緑泥片岩	図48-30	
			2.50	2.10	0.30	1.19	1.7	頁岩	図48-45	
			2.00+ α	2.40+ α	0.20		1.2	緑泥片岩	図48-49	
			1.80	1.10	0.20	1.64	0.5	頁岩	図48-50	
			2.40+ α	1.60	0.40		2.1	緑泥片岩	図48-54	
	SA9	終末期～古墳前期	4.10+ α	1.60	0.30		2.5	緑泥片岩	図48-10	
	SA10	中期末～後期初頭	1.50+ α	1.30	0.20		0.6	頁岩	図48-28	
			1.30+ α	2.10	0.30		0.8	頁岩	図48-47	埋文74集
			3.10+ α	1.80	0.40		2.0	緑泥片岩	図48-18	
			2.50+ α	1.70	0.20		1.0	頁岩	図48-25	
	SA11	後期中葉～後葉	1.60+ α	1.60	0.30		0.9	頁岩	図48-29	
			2.00+ α	1.80+ α	0.20		0.8	緑泥片岩	図48-48	
			3.10	1.30	0.20	2.38	1.2	頁岩	図48-53	
	SA12	終末期～古墳前期	4.70	1.70	0.40	2.76	3.9	頁岩	図48-2	
			4.80+ α	1.70+ α	0.30		3.2	頁岩	図48-4	
			4.30	1.40	0.30	3.07	1.9	緑泥片岩	図48-11	
	SA14	後期中葉～後葉	2.70+ α	1.40+ α	0.30		0.9	頁岩	図48-15	
			3.50	1.60	0.20	2.19	1.6	頁岩	図48-32	
			3.30	1.80	0.20	1.83	1.5	緑泥片岩	図48-34	
			2.70	1.70	0.30	1.59	1.5	頁岩	図48-52	
	SA18	中期末～古墳前期?	2.00+ α	1.60	0.30		1.2	緑泥片岩	図48-27	
	SA21	中期末～古墳前期?	3.80+ α	1.50	0.40	2.53	1.9	頁岩	図48-1	

			2.70+ α	?	0.30	1.3	緑泥片岩	図48-14		
			1.80+ α	1.80+ α	0.20	0.8	緑泥片岩	図48-20		
			1.00+ α	1.00+ α	0.10	0.1	緑泥片岩	図48-21		
	SA22	中期末～後期初頭	1.70+ α	1.60	0.30	1.2	緑泥片岩	図48-26		
			2.60+ α	1.30	0.20	1.1	緑泥片岩	図48-33		
			2.40	1.10	0.20	2.18	0.6	緑泥片岩	図48-39	
			2.10	1.00	0.30	2.10	0.5	緑泥片岩	図48-40	
			1.80+ α	1.70	0.30	1.5	緑泥片岩	図48-51		
	SA23	中期末～後期初頭	2.60+ α	2.20	0.20	1.3	緑泥片岩	図48-46		
	SA24	中期末～後期初頭	3.40	1.40	0.40	2.43	1.9	緑泥片岩	図48-16	
	P5	中期末～古墳前期?	1.90+ α	1.20	0.30	0.8	緑泥片岩	図48-38		
			4.40+ α	1.50	0.20	1.6	頁岩	図48-6		
古城遺跡			4.30+ α	1.90+ α	0.20	1.6	頁岩	図48-7	県埋文74集	
			4.10+ α	1.30	0.30	1.7	緑泥片岩	図48-8		
			3.20+ α	1.00	0.20	0.7	緑泥片岩	図48-9		
			3.40+ α	1.30	0.30	1.8	緑泥片岩	図48-12		
			3.10+ α	1.50	0.30	1.5	頁岩	図48-13		
			2.10+ α	1.50	0.20	0.9	緑泥片岩	図48-22		
	包含層	中期末～古墳前期?	4.40+ α	2.10	0.30	3.5	緑泥片岩	図48-23		
			3.20+ α	1.50+ α	0.30	1.3	緑泥片岩	図48-31		
			3.30+ α	1.50+ α	0.20	1.1	緑泥片岩	図48-36		
			2.80+ α	1.60	0.30	1.2	緑泥片岩	図48-41		
			2.20	1.60	0.30	1.38	1.4	緑泥片岩	図48-42	
			2.10+ α	1.50	0.30	1.40	1.1	頁岩	図48-43	
			2.60+ α	2.10	0.30	1.6	緑泥片岩	図48-44		
			2.90+ α	1.30	0.40	2.0	赤色頁岩	図6-15		
	1号竪穴住居跡	中期末～後期前葉	2.30	1.20	0.20	1.92	0.8	緑色頁岩	図6-16	
			2.50	1.00	0.20	2.50	0.7	黒色頁岩	図12-54	
			1.80	1.50	0.20	1.20	0.7	黒色頁岩	図12-55	
	4号竪穴住居跡	中期末～後期前葉	1.90	1.30	0.20	1.46	0.8	黒色頁岩	図12-56	
			3.10	1.60	0.20	1.94	1.3	黒色頁岩	図12-57	
			2.60+ α	1.70	0.40	1.5	黒色頁岩	図12-58		
			3.00+ α	1.80	0.30	2.3	赤色頁岩	図15-111		
	5号竪穴住居跡	後期中葉～後葉	3.00+ α	1.60	0.30	1.8	赤色頁岩	図15-112	県埋文75集	
			3.50+ α	1.70	0.30	2.1	黒色頁岩	図15-113		
			2.20+ α	1.20	0.30	0.8	緑色頁岩	図21-247		
			3.00	1.30	0.30	2.31	1.3	緑色頁岩	図21-248	
			3.50+ α	1.20	0.30	1.3	緑色頁岩	図21-249		
			4.30	1.90	0.30	2.26	3.3	赤色頁岩	図21-250	
	包含層	中期末～後期後葉?	3.40+ α	1.90	0.40	2.6	黒色頁岩	図21-251		
			3.30+ α	2.70	0.30	3.7	黒色頁岩	図21-252		
			1.60+ α	1.80	0.20	0.8	緑-黒色頁岩	図21-253		
			4.10	2.30	0.40	1.78	5.2	黒色頁岩	図21-254	
			2.90+ α	2.10	0.30	1.5	緑色凝灰岩	図150-772		
山田遺跡	表採	?	2.60	1.60	0.40	1.63	1.4	千枚岩	図150-773	
	SA1	終末期?	2.20+ α	1.80	0.20	0.8	黒色千枚岩	図25-122		
			3.65	2.15	0.35	1.70	3.0	黒色千枚岩	図25-123	
			4.50+ α	2.10	0.35	3.1	緑色頁岩	図26-131		
			4.00	1.85	0.40	2.16	2.8	緑色頁岩	図26-132	
	野門遺跡	包含層	2.50+ α	1.55	0.20	1.3	緑色頁岩	図26-133	県埋文136集	
		中期～後期?	4.02	1.75	0.23	2.30	1.8	緑色凝灰岩	図26-139	
			3.35+ α	1.90+ α	0.49	2.8	緑色凝灰岩	図26-140		
			3.20	1.95	0.50	1.64	3.1	緑色凝灰岩	図26-141	
	林遺跡	包含層	2.90+ α	2.00	0.30	2.7	緑泥片岩	図16-31	県埋文174集	
	板平遺跡	包含層	4.50	2.40+ α	0.40	4.7	緑色片岩	図75-400	県埋文176集	
			2.90+ α	1.70+ α	0.30	1.7	緑色頁岩	図65-609		
	内野々遺跡	包含層	3.00+ α	1.90	0.50	2.5	頁岩	図65-610	県埋文202集	
		後期～古墳初頭?	1.30+ α	2.40+ α	0.30	1.2	頁岩	図65-611		
	内野々第3遺跡	包含層	1.90+ α	1.90+ α	0.30	1.3	頁岩	図9-1	県埋文202集	
	八幡第2遺跡	SA5内土坑	4.80	2.70	0.30	1.78	5.4	ホルンフェルス	図24-59	
	銀座第2遺跡	包含層	3.45+ α	1.80	0.15	1.5	チャート	図63-234	県埋文115集	
		後期後半～終末?	3.30	1.60	0.30	2.06	1.4	頁岩	図29-185	
	蔵座村遺跡	包含層	5.20	2.20	0.30	2.36	2.6	頁岩	図29-186	県埋文53集
		?	4.30+ α	1.70	0.30	2.8	緑色凝灰岩	図49-346		
	SA2	中期前半	3.50+ α	2.20+ α	0.20	1.7	緑色凝灰岩	図58-466	県埋文184集	
	赤石遺跡	包含層	3.10+ α	2.80	0.60	5.4	緑色凝灰岩	図58-467		
		中期?	3.80	2.50	0.30	1.52	3.9	緑色頁岩	図52-334	
	SA10	後期後半～終末期	1.90+ α	1.60	0.30	0.9	緑色頁岩	図64-367	県埋文151集	
	SA20	後期後半～終末期								

国光原遺跡	SA7	終末期	2.10+ α	1.80	0.20		1.2	緑色頁岩	図72-340	県埋文149集	
			2.40+ α	2.10	0.20		1.5	緑色頁岩	図72-341		
			2.10	2.00	0.20	1.05	1.2	緑色頁岩	図72-342		
湯牟田遺跡	SA1	後期後葉～終末期	2.20+ α	3.00	0.30		2.3	頁岩	図85-324	県埋文152集	
	SA4	後期後葉～終末期	4.20	2.30+ α	0.30	1.83	4.1	頁岩	図88-351		
	SA5	後期後葉～終末期	3.20	1.60+ α	0.40	2.00	2.8	頁岩	図89-366		
	SA7	古墳初頭～前期前半	1.30+ α	2.00+ α	0.10		0.7	頁岩	図90-382		
尾花坂上遺跡	包含層	後期後半～終末?	3.4+ α	2.20	0.25		2.7	緑色凝灰岩	図25-110	県埋文101集	
	1拵-S292	中期末～後期初頭	3.70+ α	2.00	0.30		2.3	緑色頁岩	図221-2212		
1拵-S409	中期末～後期初頭		2.70	2.00	0.30	1.35	2.2	頁岩	図222-2224		
			3.30+ α	1.10	0.20		1.1	頁岩	図222-2225		
2-S3009	中期末～後期初頭		3.70+ α	1.80	0.30		2.2	頁岩	図222-2226		
2-S3334	中期末～後期初頭		3.50	2.80	0.30	1.25	4.5	頁岩	図232-2342		
2-S3334	中期末～後期初頭		3.20	1.70	0.30	1.88	1.5	緑色頁岩	図233-2358		
2-S3334	中期末～後期初頭		6.90+ α	1.70+ α	0.30	4.06	5.1	頁岩	図233-2359		
2-S3335	中期末～後期初頭		2.50+ α	2.30	0.30		2.4	緑色頁岩	図234-2362		
3-S9	中期末～後期初頭		2.40+ α	2.30	0.20		1.6	赤色頁岩	図237-2385		
			2.70+ α	1.60+ α	0.30		1.6	緑色頁岩	図237-2386		
			2.30+ α	2.10	0.20		1.4	緑色頁岩	図237-2387		
			2.20	1.30+ α	0.20	1.69	1.1	緑色頁岩	図237-2388		
3-S106	中期末～後期初頭		3.20+ α	2.40+ α	0.20		2.1	緑色頁岩	図238-2398		
			2.80	1.70	0.20	1.65	1.0	緑色頁岩	図238-2399		
			2.60+ α	1.70+ α	0.20	1.53	0.9	緑色頁岩	図238-2400		
3-S114	中期末～後期初頭		2.90	1.80	0.15	1.61	1.2	緑色頁岩	図241-2445		
			2.80	1.40	0.30	2.00	1.4	緑色頁岩	図241-2446		
			4.30+ α	2.20	0.40		4.2	赤色頁岩	図241-2447		
3-S115	中期末～後期初頭		2.70+ α	1.80+ α	0.20		1.2	頁岩	図241-2448		
			3.50	1.90	0.20	1.84	1.8	赤色頁岩	図243-2466		
3-S119	中期末～後期初頭		3.30	1.80	0.20	1.83	1.6	赤色頁岩	図243-2467		
			2.70+ α	2.30	0.20		1.7	赤色頁岩	図243-2468		
			3.30+ α	2.40+ α	0.20	1.38	2.2	緑色頁岩	図243-2469		
			2.70	2.20	0.10	1.23	0.9	緑色頁岩	図243-2470		
			2.50	2.1+ α	0.20		1.2	緑色頁岩	図243-2471		
			2.20	1.60	0.20	1.38	0.9	緑色頁岩	図243-2472		
			2.80+ α	1.80+ α	0.20		1.5	緑色頁岩	図243-2473		
			3.90	2.30+ α	0.30	1.70	3.3	頁岩	図243-2474		
			1.90+ α	1.20	0.00		0.3	緑色頁岩	図243-2476		
			2.00	1.60	0.20	1.25	0.8	緑色頁岩	図243-2477		
尾花A遺跡	3-S121	中期末～後期初頭		4.30	1.50	0.20	2.87	1.9	頁岩	図244-2509	県埋文195集
				3.20+ α	2.00+ α	0.20		2.1	緑色頁岩	図244-2510	
				2.50+ α	1.20+ α	0.20		0.7	緑色頁岩	図244-2511	
				2.50	3.50	0.30	0.71	1.4	頁岩	図244-2512	
				3.80	1.80	0.30	2.11	2.5	頁岩	図244-2513	
				2.80	2.90+ α	0.20		1.5	赤色頁岩	図246-2537	
				1.40+ α	1.90	0.20		1.1	頁岩	図247-2554	
				2.90	2.20+ α	0.20	1.32	1.7	頁岩	図247-2555	
				2.70+ α	1.80	0.20		1.3	緑色頁岩	図247-2556	
				2.10	1.70	0.20	1.24	1.1	頁岩	図247-2557	
3-S156	中期末～後期初頭		2.60+ α	2.10+ α	0.20		1.5	緑色頁岩	図247-2558		
3-S161	中期末～後期初頭		2.50	1.40+ α	0.20		1.0	頁岩	図247-2562		
3-S162	後期後葉		3.20+ α	1.80+ α	0.30		1.6	緑色頁岩	図247-2568		
1拵-S1016	終末期(III)		3.90+ α	2.10+ α	0.30		2.1	緑色頁岩	図225-2265		
3-S118	終末期(III)		3.40+ α	1.80	0.20		2.0	頁岩	図242-2461		
1拵-S347	終末期(IV)		3.70+ α	2.40+ α	0.30		2.9	頁岩	図222-2222		
3-S109	終末期(IV)		1.90+ α	1.70	0.20	1.12	0.6	緑色頁岩	図240-2423		
			2.30+ α	1.70	0.20		1.3	緑色頁岩	図240-2424		
1-SA15	古墳		3.10	1.60	0.30	1.94	1.6	緑色頁岩	図215-2138		
1-SA45	古墳		2.90+ α	1.90+ α	0.30		1.6	頁岩	図217-2166		
1拵-S5	古墳		3.10+ α	2.30+ α	0.30		2.3	赤色頁岩	図220-2193		
1拵-S37	古墳		2.20+ α	2.00	0.30		1.4	緑色頁岩	図220-2200		
1拵-S70	古墳		1.60+ α	2.30+ α	0.20		0.8	緑色頁岩	図221-2204		
			2.30+ α	2.00+ α	0.20		1.0	緑色頁岩	図221-2205		
1拵-S105	古墳		2.30+ α	2.10+ α	0.20		1.3	赤色頁岩	図221-2206		
2-S3001	古墳		2.50+ α	1.90+ α	0.20		1.2	緑色頁岩	図232-2338		
3-S108	古墳		3.80+ α	1.80	0.30		2.1	緑色頁岩	図239-2421		
			2.30+ α	2.50	0.30		2.2	緑色頁岩	図239-2422		
3-S112	古墳		2.60+ α	1.60	0.30		1.2	頁岩	図231-2438		
3-S117	古墳		2.00+ α	1.50+ α	0.20		0.7	緑色頁岩	図242-2455		

尾花A遺跡	3-S123	古墳	2.30+ α	2.40	0.20	1.5	緑色頁岩	図245-2529	県埋文195集				
	3-S158	古墳	2.70	1.80	0.20	1.50	1.2	緑色頁岩		図247-2559			
	3-S158	古墳	3.80+ α	2.10+ α	0.30	3.1		頁岩		図247-2560			
	包含層	?	2.70	2.10	0.20	1.29	1.3	緑色頁岩		図219-2184			
	1拵-包含層	?	3.60	2.70+ α	0.20	1.33	2.2	緑色頁岩		図226-2282			
	2-包含層	?	4.30	2.50	0.60	1.72	7.0	頁岩		図236-2379			
野首第2遺跡	包含層	?											
			+ α						頁岩	図175-1439			
			+ α	+ α					頁岩	図175-1440			
老瀬坂上第3遺跡	包含層	中期～後期?	4.80+ α	2.60	0.30		5.5	緑色凝灰岩	図118-454	県埋文118集			
			2.50+ α	1.70	0.20		0.9	緑色凝灰岩	図118-455				
唐木戸第2遺跡	SE6(溝状遺構)	?	2.95	2.00	0.20	1.48	1.2	緑色凝灰岩	図26-9	県埋文100集			
西畦原第1遺跡	包含層	中期末～後期初?	2.60+ α	1.60+	0.25		1.4		頁岩	図40-139	県埋文82集		
			3.00+ α	2.45+	0.25		2.7		頁岩	図40-140			
尾小原遺跡	SA1	中期末～後期初?							緑色凝灰岩	図63-255	県埋文117集		
			3.50	1.85	0.27	1.89	1.7		緑色凝灰岩	図44-222			
			3.65	2.10	0.24	1.74	2.6		緑色凝灰岩	図44-223			
			2.40+ α	1.55	0.22		0.9		緑色凝灰岩	図44-224			
			4.00	1.85	0.30	2.16	1.7		緑色凝灰岩	図44-225			
			3.30	2.30	0.20	1.43	2.0		緑色凝灰岩	図44-226			
向原第1遺跡	SA3	中期後半	1.90	1.35	0.18	1.41	0.6		緑色凝灰岩	図44-227	県埋文119集		
			2.80	1.45	0.25	1.93	1.5		緑色凝灰岩	図58-302			
			2.10+ α	1.40	0.10		0.7		緑色凝灰岩	図58-303			
			2.50	1.90	0.30	1.32	1.5		緑色頁岩	図72-966			
			S4722(ビット)	?	2.50	1.90	0.30	1.32	1.5	緑色頁岩		図72-966	
			S4425	9世紀	2.70	1.90	0.20	1.42	0.9			黒色頁岩	図72-967
宮ノ東遺跡	S8833	6世紀中葉	2.80+ α	2.20+ α	0.30		2.3		緑色頁岩	図72-968	県埋文173集		
			包含層	?	3.10	1.50	0.30	2.07	1.4			黒色頁岩	図72-969
			S7241(ビット)	?	2.50+ α	2.70	0.30		3.2			緑色頁岩	図72-970
			S8870	8世紀前葉～中	2.20+ α	2.10+ α	0.40		1.8			緑色頁岩	図72-971
			包含層	?	3.30+ α	2.60+ α	0.30		3.6			緑色頁岩	図72-972
			包含層	?	4.30	2.20	0.40	1.95	4.2			黒色頁岩	図72-973
内城跡	包含層	?	?	?	0.23				赤色頁岩	図49-239	県埋文51集		
			1.40+ α	1.60	0.20		0.7		頁岩	図5-1			
下那珂遺跡	包含層	後期～終末期?	2.80	1.60	0.30	1.75	1.6		頁岩	図5-2	県埋文90集		
			3.00	1.80	0.20	1.67	1.3		頁岩	図5-3			
			2.20+ α	1.90+ α	0.20		1.6		頁岩	図5-4			
			2.90	2.90	0.30	1.00	2.0		頁岩	図5-5			
			3.00	2.00	0.20	1.50	2.2		頁岩	図5-6			
			3.00	2.00	0.30	1.50	2.6		頁岩	図5-7			
			2.90	1.80	0.30	1.61	2.2		頁岩	図5-8			
			3.10+ α	1.90	0.40	1.63	2.0		頁岩	図5-9			
			3.40	1.80	0.30	1.89	2.0		頁岩	図5-10			
			3.30	2.20	0.40	1.50	2.2		ホルンフェルス	図5-11			
			3.60	2.00	0.30	1.80	2.8		頁岩	図5-12			
			2.00+ α	2.10	0.20		1.6		頁岩	図5-13			
			3.50	2.10	0.30	1.67	2.4		頁岩	図5-14			
			3.20+ α	2.00	0.20		1.5		頁岩	図5-15			
			3.90+ α	1.90	0.20		1.6		頁岩	図5-16			
			3.30	1.60	0.30		1.9		頁岩	図5-17			
			1.90+ α	2.00	0.20		1.1		頁岩	図5-18			
			4.00	2.30	0.30	1.74	2.3		頁岩	図5-19			
			3.70	2.30	0.30	1.61	3.4		頁岩	図5-20			
			3.60	2.30	0.30	1.57	2.9		頁岩	図5-21			
			2.90+ α	3.00	0.20		2.3		頁岩	図5-22			
			2.90+ α	2.90	0.40		3.0		頁岩	図5-23			
			3.90+ α	1.20	0.30		2.7		頁岩	図5-24			
			3.80	2.00	0.20	1.90	2.4		頁岩	図5-25			
			4.70	2.50	0.40	1.88	5.5		頁岩	図5-26			
			4.50	2.70	0.40	1.67	5.6		頁岩	図5-27			
			4.70	2.30	0.40	2.04	6.8		頁岩	図5-28			
			2.50+ α	2.20	0.30		2.6		頁岩	図5-29			
			2.90+ α	2.50	0.30		2.7		頁岩	図5-30			
			4.20+ α	2.40	0.30		4.6		頁岩	図5-31			
			5.30+ α	2.30	0.40	2.30	6.0		ホルンフェルス	図5-32			
			3.50+ α	2.10	0.40		3.8		頁岩	図5-33			
			3.90+ α	1.00+ α	0.40		1.8		頁岩	図5-34			
			3.20	1.50	0.30	2.13	1.3		頁岩	図5-35			

			5.80	3.40+ α	0.30	1.71	7.6	頁岩	図6-36	
			5.90+ α	2.80	0.40	2.11	10.8	頁岩	図6-37	
			4.00	1.50	0.30	2.67	2.0	頁岩	図6-38	
			2.80+ α	1.70	0.30		2.1	頁岩	図6-39	
			3.70	1.00+ α	0.40		1.8	頁岩	図6-40	
			3.50	1.00	0.30	3.50	1.5	頁岩	図6-41	
	包含層	後期～終末期?	3.90+ α	1.60	0.20	2.44	1.8	頁岩	図6-42	
			4.20+ α	3.10	0.60		8.8	頁岩	図6-43	
			3.10+ α	2.70+ α	0.20		3.0	頁岩	図6-44	
			1.80+ α	1.80	0.30		1.2	頁岩	図6-45	
			2.00+ α	2.10	0.30		1.5	頁岩	図6-46	
			3.10	1.10	0.30	2.82	1.2	頁岩	図6-47	
下那珂遺跡	12号竪穴住居跡	後期～終末期	2.10	1.90	0.30	1.11	1.1	頁岩	図60-428	県埋文90集
	13号竪穴住居跡	後期～終末期	3.00+ α	2.50+ α	0.30		2.5	頁岩	図96-559	
	32号竪穴住居跡	後期～終末期	3.90	2.10	0.30	1.86	2.5	頁岩	図88-500	
			2.70+ α	3.00	0.30	0.90	1.9	頁岩	図88-501	
	33号竪穴住居跡	後期～終末期	4.00+ α	3.50+ α	0.50		?	頁岩	図88-505	
			2.80	1.40	0.30	2.00	1.3	頁岩	図88-506	
	42号竪穴住居跡	後期～終末期	3.30	2.20	0.40	1.50	3.2	頁岩	図48-413	
	54号竪穴住居跡	後期～終末期	2.60	2.10	0.30	1.24	2.3	頁岩	図100-601	
	58号竪穴住居跡	後期～終末期	2.00	1.30	0.40	1.54	1.4	頁岩	図105-619	
	90号竪穴住居跡	後期～終末期	2.90+ α	1.40	0.30	2.07	1.3	頁岩	図112-1162	
	91号竪穴住居跡	後期～終末期	3.90	1.80	0.20	2.17	2.1	頁岩	図115-657	
	95号竪穴住居跡	後期～終末期	3.10	2.20	0.30	1.41	2.5	頁岩	図121-682	
	109号竪穴住居跡	後期～終末期	3.50	2.30	0.30	1.52	3.3	頁岩	図146-862	
	114号竪穴住居跡	後期～終末期	5.60+ α	2.10+ α	0.60		8.0	頁岩	図152-901	
	116号竪穴住居跡	後期～終末期	2.40+ α	2.10	0.20		1.9	頁岩	図160-1024	
	9号土坑	後期～終末期	3.40	2.00	0.20	1.70	2.4	頁岩	図102-611	
木脇遺跡	包含層?	?	3.75	2.25	0.30	1.67	2.1	珪質頁岩	図136-17	県埋文43集
	包含層	?	3.20	2.10	0.38	1.52	2.5	珪質頁岩	図136-18	
井手口遺跡	自然流路A・B	?	5.60+ α	2.80+ α	0.40		?	?	図11-63	県埋文44集
塚原遺跡	S C 6	?	3.73	2.21	0.26	1.69	2.4	凝灰岩	図64-2	県埋文44集
	S C 7	?	4.72	1.61	0.20	2.93	2.7	凝灰岩	図62-6	
山之城跡	包含層	?	1.7+ α	1.6+ α	0.25		0.7	砂岩	図12-47	県埋文171集
上の原第1遺跡	包含層	?	3.30+ α	2.30+ α	0.30		2.0	凝灰質頁岩	図15-49	県埋文62集
	A区包含層	?	2.55+ α	3.40	0.20		2.6	頁岩	図29-513	
	B1区SA1	中期前半?	3.00	2.65	0.30	1.13	2.6	頁岩	図33-547	
	B1区SA4	中期後半	2.30+ α	1.80+ α	0.30		1.0	頁岩	図38-590	
			4.10+ α	3.20	0.30		5.4	緑色凝灰岩	図42-615	
	B1区包含層	?	2.55	2.45	0.13	1.04	1.4	緑色凝灰岩	図42-616	
市位遺跡	B2区SA5	中期?	2.30+ α	2.00	0.20		1.4	凝灰岩	図45-648	県埋文10集
	B2区SA7	中期?	3.15	2.43	0.22	1.30	2.0	凝灰岩?	図50-691	
			1.95+ α	1.75	0.20		0.6	凝灰岩	図53-708	
	B2区SA8	平安	2.85+ α	2.90	0.20		1.2	凝灰岩	図53-709	
	B2区SC3	中期後半?	3.30	3.00	0.25	1.10	2.9	凝灰岩	図56-736	
	B2区包含層	?	4.50	3.25	0.30	1.38	5.9	凝灰岩	図59-773	
	B3区包含層	?	3.45+ α	2.70	0.25	1.28	2.4	頁岩	図59-774	
天神河内第1遺跡	包含層	?	1.99+ α	1.93+ α	0.29		1.1	頁岩系	図72-96	県教委1991
			1.55+ α	2.08+ α	0.20		0.8	頁岩系	図72-97	
			2.20	1.70	0.20	1.29	0.9	緑色頁岩	図27-200	
大窪第1遺跡	包含層	?	3.20	2.10+ α	0.20	1.52	1.3	頁岩	図27-201	県埋文238集
			3.00	2.30	0.30	1.30	1.7	緑色頁岩	図27-202	
			3.10	2.10	0.30	1.48	2.0	緑色頁岩	図27-203	
			3.50	2.10	0.30	1.67	2.0	緑色チャート	図27-204	
	4号住居跡	後期初頭	3.80	2.60	0.20	1.46	1.8	緑色凝灰岩	図19-37	
下大五郎遺跡	5号住居跡	後期初頭	2.00+ α	2.30	0.20		1.1	頁岩	図19-43	県埋文113集
			2.00+ α	1.75	0.20		1.0	頁岩	図19-45	
	8号住居跡	後期初頭	2.45	1.75	0.25	1.40	1.2	頁岩	図26-167	
			1.95	1.70	0.20	1.15	0.9	緑色凝灰岩	図28-208	
	11号住居跡	後期初頭	3.10	2.25	0.20	1.38	1.4	緑色凝灰岩	図28-209	
大島島田遺跡	包含層	?	+ α					?	図105-1673	県埋文178集
			2.20	1.80	0.20	1.22	1.0	緑色片岩	図105-1674	
	1号竪穴住居跡	中期中葉～後期初頭	2.50+ α	2.45+ α	0.20		1.3	緑色頁岩	図7-18	
			2.45	2.20	0.25	1.11	1.8	頁岩	図17-50	
諸表遺跡	4号竪穴住居跡	中期中葉～後期初頭	1.80	2.00	0.20	0.90	1.2	緑色頁岩	図17-51	県埋文168集
			3.35+ α	1.50	0.25		2.1	頁岩	図17-52	
			1.85+ α	1.15+ α	0.20		0.4	頁岩	図17-53	
			1.60	1.40	0.20	1.14	0.7	頁岩	図17-54	

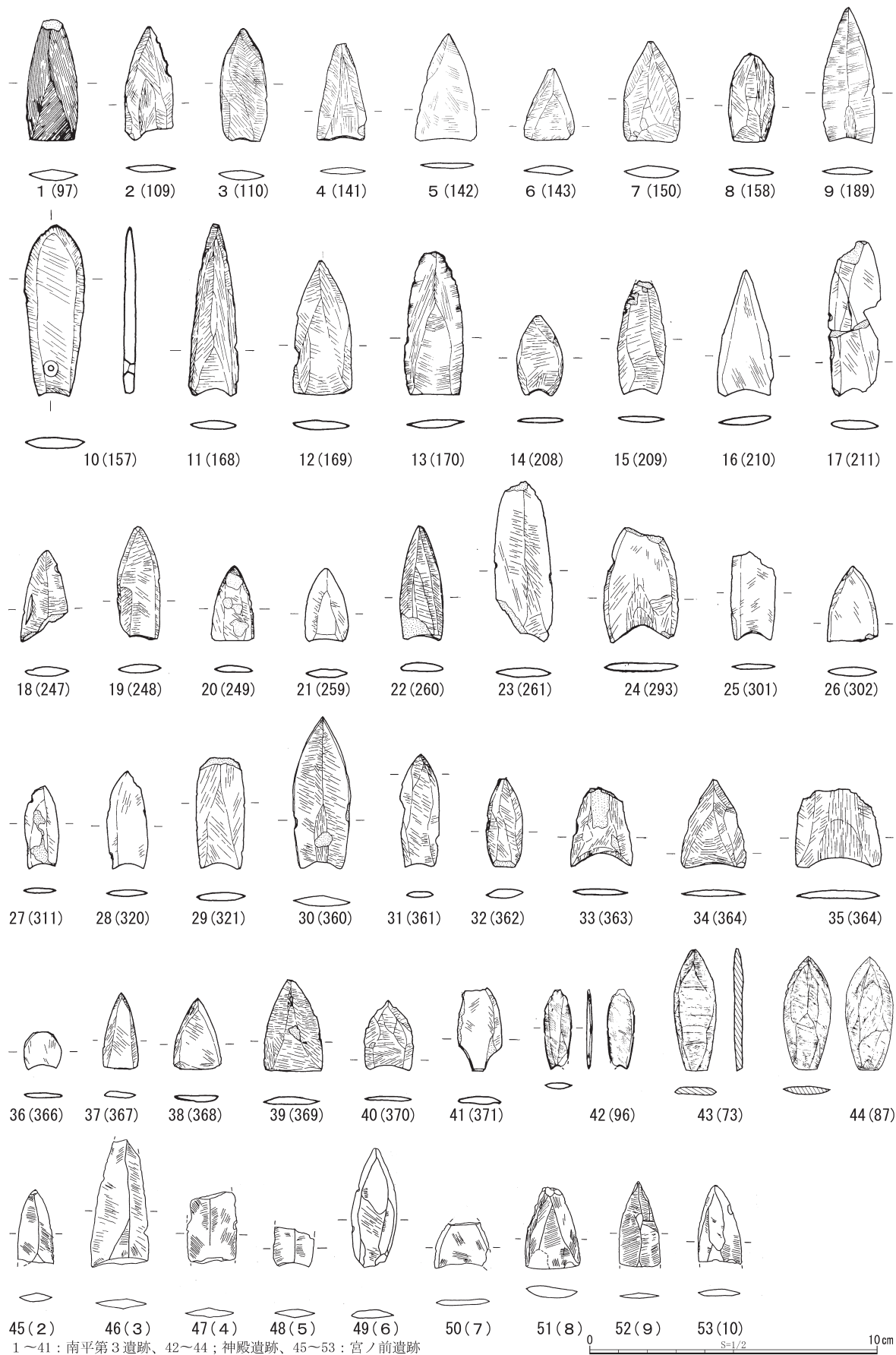
諸麦遺跡	4号竪穴住居跡	中期中葉～後期初頭	1.50	0.60	0.15	2.50	0.3	頁岩	図17-55	県埋文168集	
	8号竪穴住居跡	中期中葉～後期初頭	1.95	1.68	0.20	1.16	0.6	頁岩	図24-79		
	包含層	?	4.20+ α	2.00	0.35		4.1		頁岩		図41-144
			2.40	2.50	0.30	0.96	1.5		頁岩		図43-175
			3.70	2.45	0.20	1.51	2.5	頁岩	図43-176		
働女木遺跡	SA1	中期後半	2.50	1.90+ α	0.20	1.32	1.1	頁岩	図21-138	県埋文205集	
	SA2	中期後半	2.40+ α	2.30+ α	0.20		1.2	頁岩	図23-150		
	SA3	中期後半	2.20+ α	1.60+ α	0.30	1.38	1.0		頁岩		図25-158
			2.80+ α	1.80+ α	0.20	1.56	1.2		頁岩		図25-159
	SA6	中期後半	3.80	2.90	0.70	1.31	6.1		頁岩		図31-185
	SA7	中期後半	1.90+ α	1.90+ α	0.30		1.1		頁岩		図33-200
			1.50	1.90	0.30	0.79	0.7		頁岩		図33-202
			4.10	3.80	0.60	1.08	9.3		頁岩		図33-203
	SA12	中期後半	3.20+ α	1.80+ α	0.20		1.4		頁岩		図46-278
	SH1(ピット)	中期後半?	3.90	3.00	0.40	1.30	6.8		頁岩		図61-283
			2.70	2.00	0.30	1.35	2.1		頁岩		図61-284
			2.20	2.00	0.30	1.10	3.2		頁岩		図61-285
3.20+ α			2.10	0.30		1.6		頁岩	図65-352		
2.20			2.30	0.30	0.96	1.4		頁岩	図65-353		
2.60			1.70+ α	0.20		1.0		頁岩	図65-354		
包含層	中期後半?	1.80+ α	2.00+ α	0.20		1.1		頁岩	図65-355		
		5.00	5.10	0.60	0.98	17.4		緑色泥岩	図65-360		
		2.90	2.10	0.40	1.38	3.3		緑色泥岩	図65-361		
S12	古墳後期	3.84	3.02	0.42	1.27	5.6		頁岩	図88-571	県埋文237集	
S28(溝状遺構)	近世以降	2.86	1.99	0.25	1.44	1.7		頁岩	図88-572		
大年遺跡	包含層	?	2.34	1.78+ α	0.20		1.0		頁岩		図88-573
			2.21	1.36	0.13	1.63	0.5		頁岩		図88-574
			2.47	1.80	0.18	1.37	0.9		頁岩		図88-575
			1.65+ α	1.13+ α	0.17		0.3		頁岩		図88-576
			2.14+ α	1.73+ α	0.18		0.8		頁岩		図88-577
荒迫遺跡	包含層	?	2.40+ α	2.30	0.28		1.6		頁岩		図52-362
			2.70+ α	2.50+ α	0.20		2.1		凝灰岩		図52-363
			2.75+ α	1.50+ α	0.18		1.2		頁岩		図75-582
			1.80+ α	1.88	0.20	0.96	0.9		結晶片岩	図131-979	
3.39	2.25	0.20	1.51	1.7		頁岩	図6-1	県教委1994			
1.96+ α	2.15+ α	0.18		1.1		頁岩	図6-2				
1.60+ α	1.90	0.25		1.1		頁岩	図6-3				
2.95+ α	2.10	0.25		1.8		頁岩	図6-4				
1.45+ α	2.20	0.20		1.1		頁岩	図6-5				
2.00	1.65	0.15	1.21	0.6		頁岩	図6-6				
1.65+ α	1.55+ α	0.15		0.5		頁岩	図6-7				
3.40+ α	1.95	0.20		1.7		頁岩	図6-8				
2.50+ α	1.72+ α	0.15		0.9		頁岩	図6-9				
2.43	1.90	0.15	1.28	1.2		頁岩	図6-10				
2.10+ α	1.80	0.19		0.9		頁岩	図6-11				
1.95+ α	1.40+ α	0.20		0.6		頁岩	図6-12				
3.32+ α	2.35	0.20		2.6		頁岩	図6-13				
3.03	2.45	0.18	1.24	2.2		頁岩	図6-14				
3.10	2.20	0.28	1.41	2.5		頁岩	図6-15				

※記載事項は基本的に報告書記載に従っている。なお、遺構略号SAは竪穴建物跡を示す。

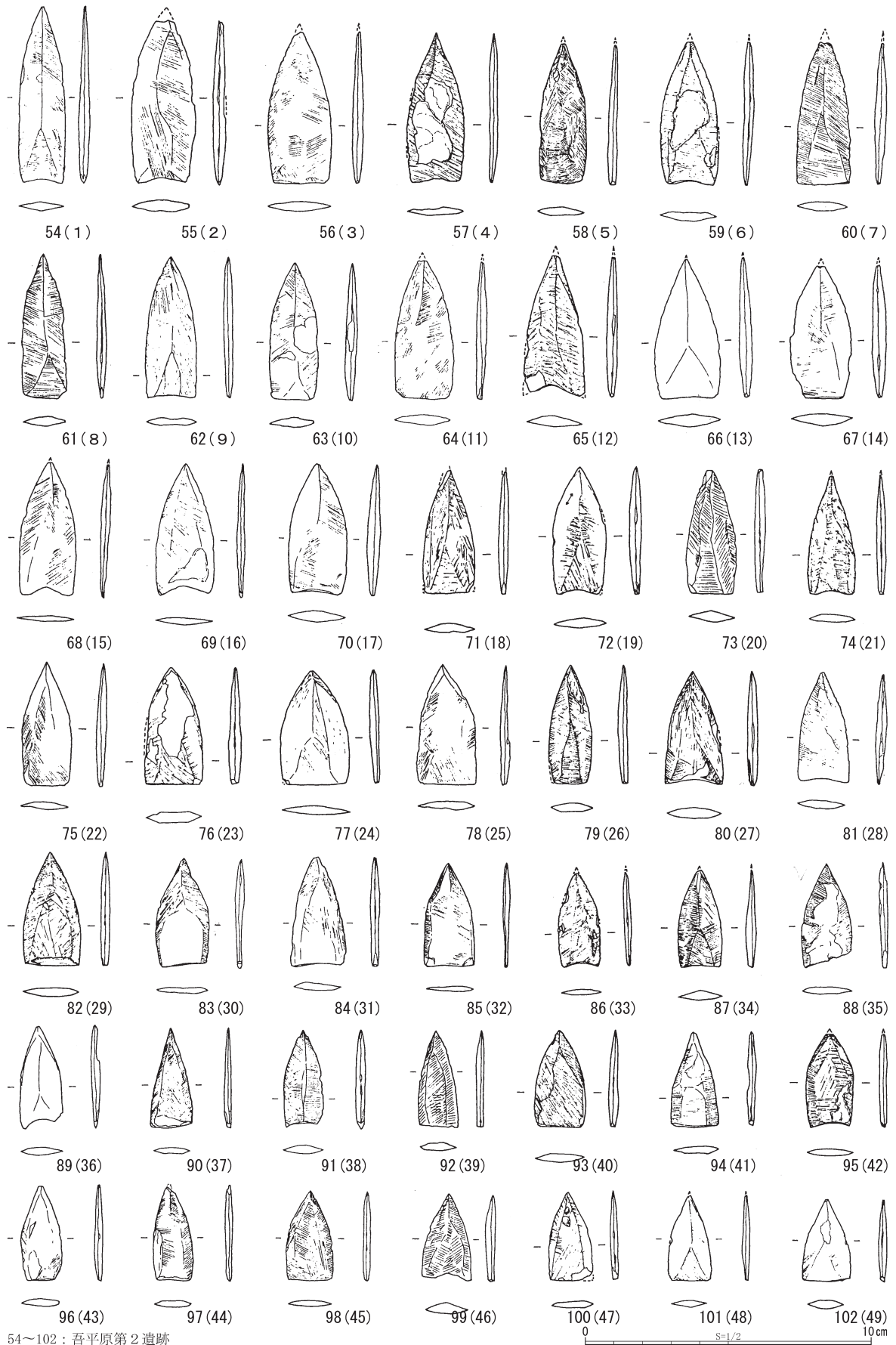
計測値について、少数第2位の数値が未記載のものは当該数値を便宜的に「0」としている。

報告書掲載番号は、報告書中で「第○図」となっているものも、全て「図○」として統一して記載している。

南平第3遺跡の掲載番号362～373は、報告書図上では「360～371」であるが、記載内容から362～373が正しいと思われる。

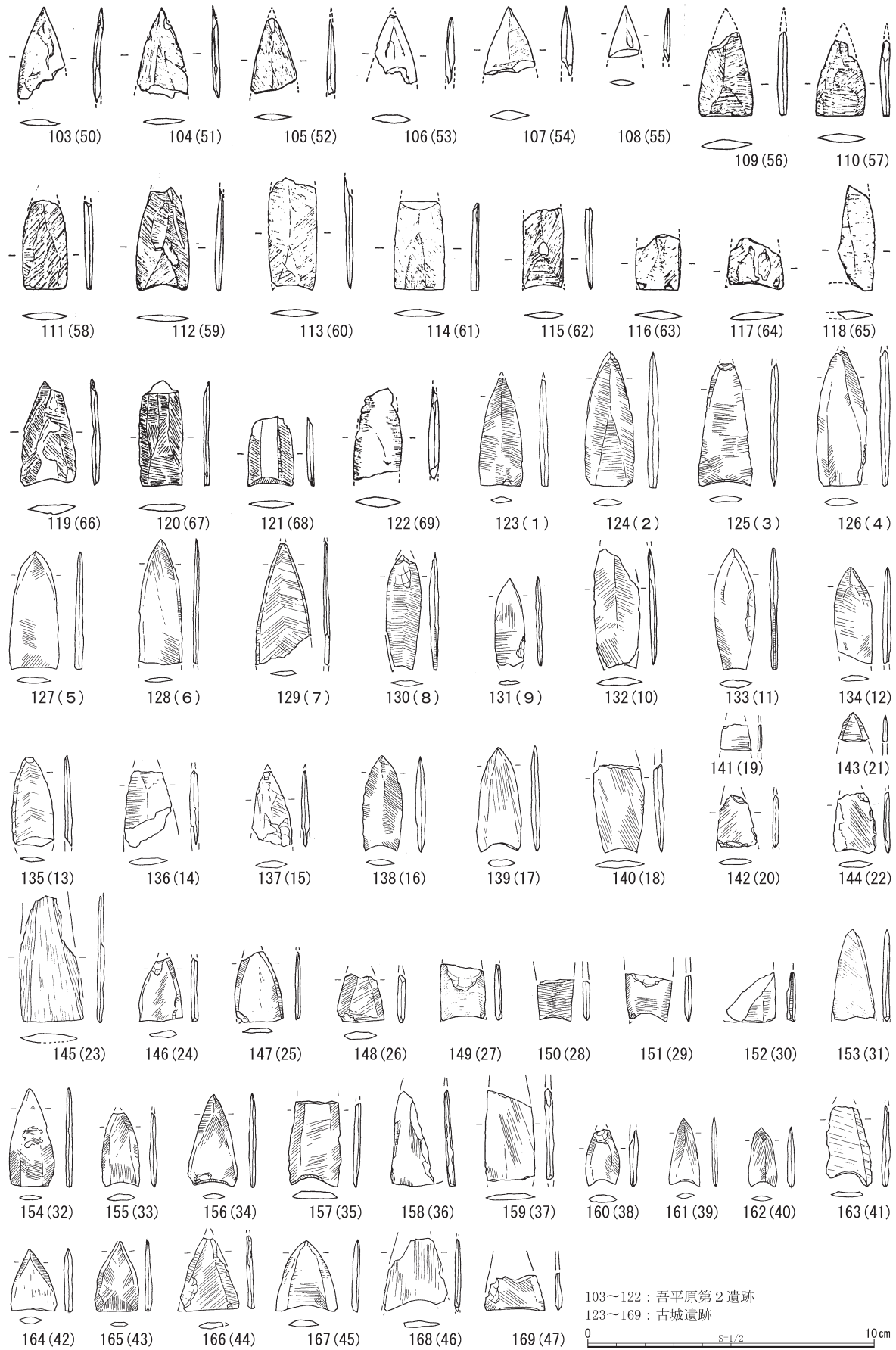


集成資料図1 (各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号)

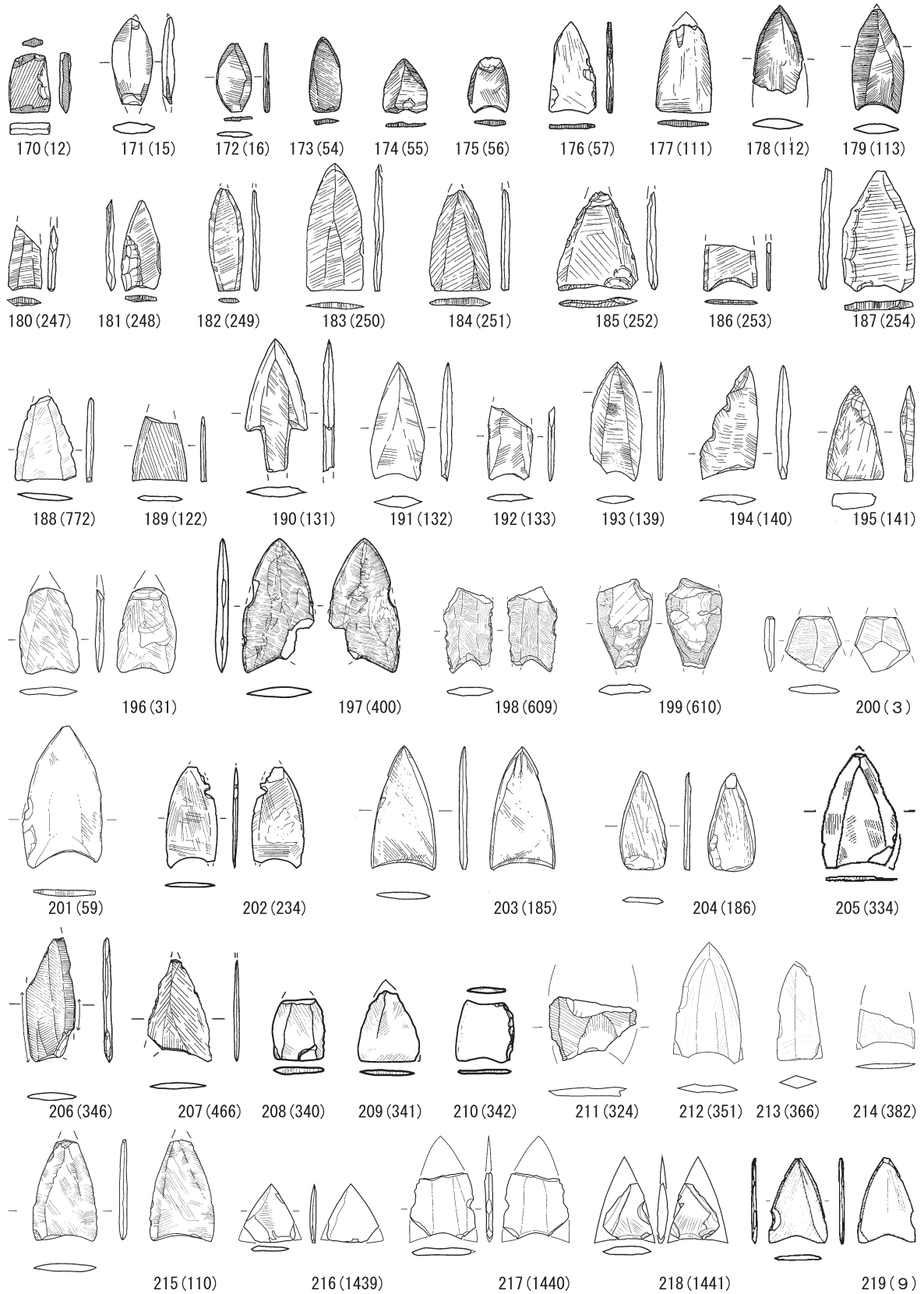


54~102: 吾平原第2遺跡

集成資料図2 (各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号)



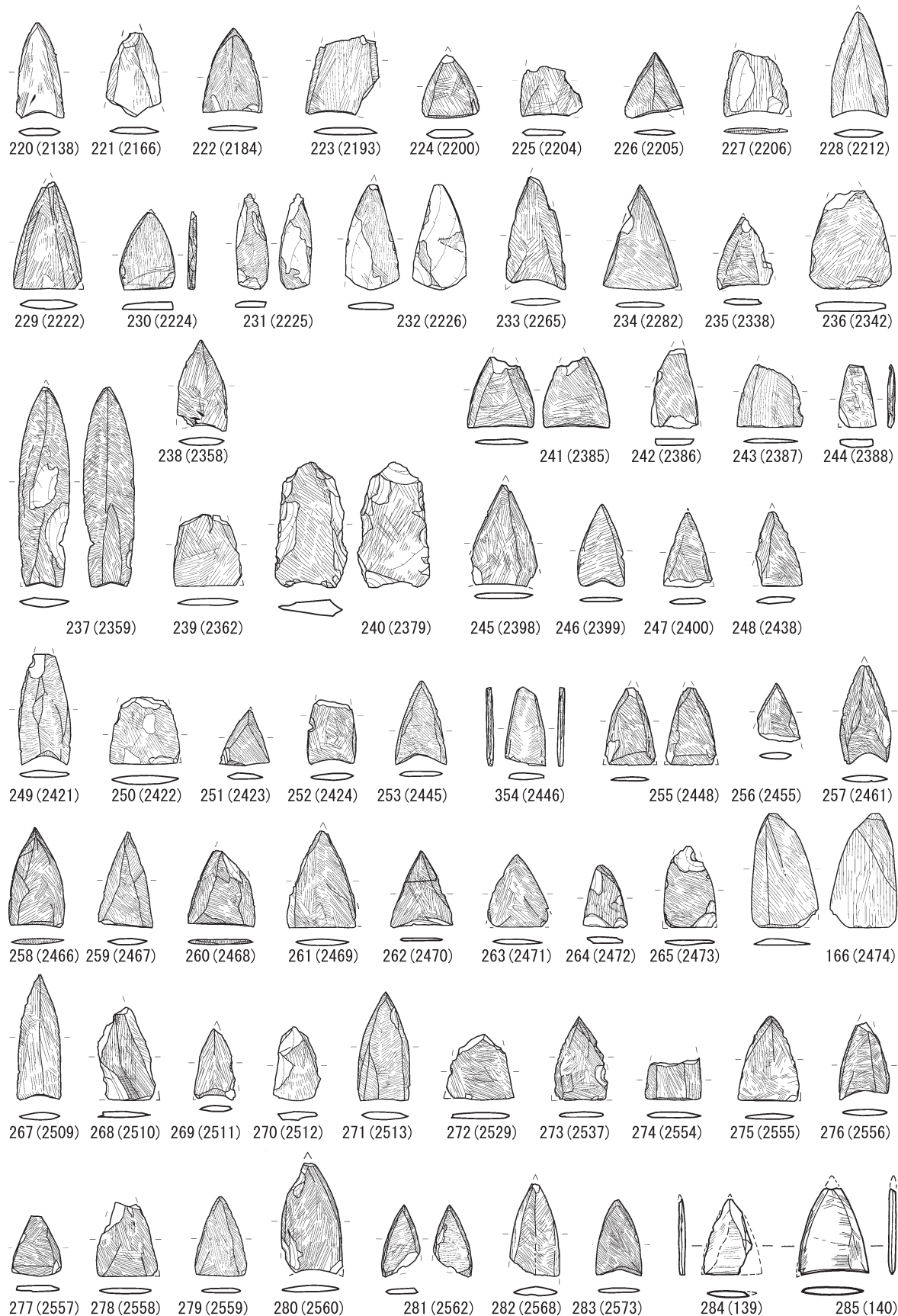
集成資料図3 (各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号)



170～187：五ヶ村遺跡、188：山田遺跡、189～195：野門遺跡、196：林遺跡、197：板平遺跡、198・199：内野々遺跡、200：内野々第3遺跡、
 201：八幡第2遺跡、202：銀座第2遺跡、203・204：藏座村遺跡、205：赤坂遺跡、206・207：赤石遺跡、208～210：国光原遺跡、
 211～214：湯牟田遺跡、215：尾花坂上遺跡、216～218：野首第2遺跡、219：唐木戸第2遺跡

0 S=1/2 10cm

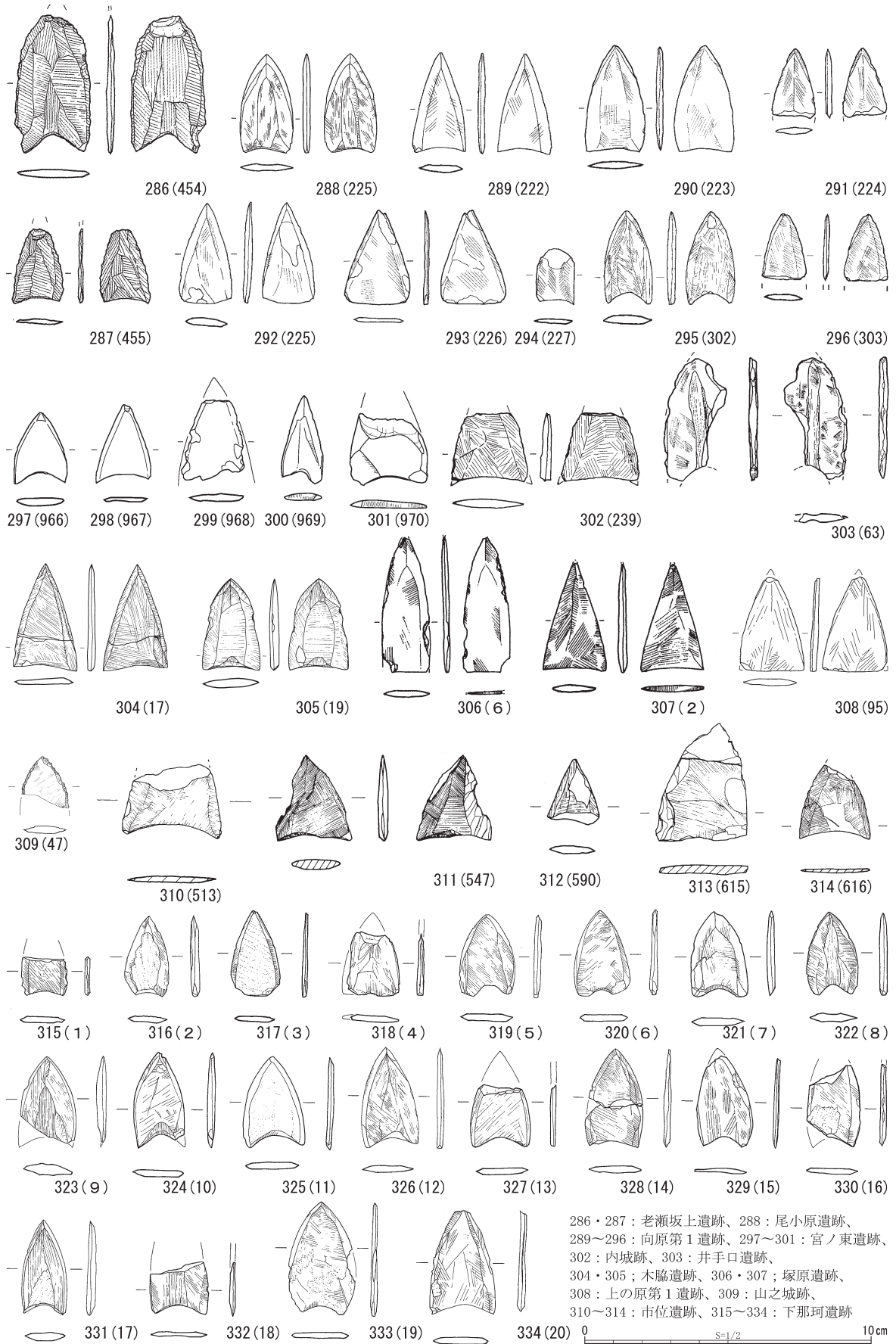
集成資料図4（各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号）



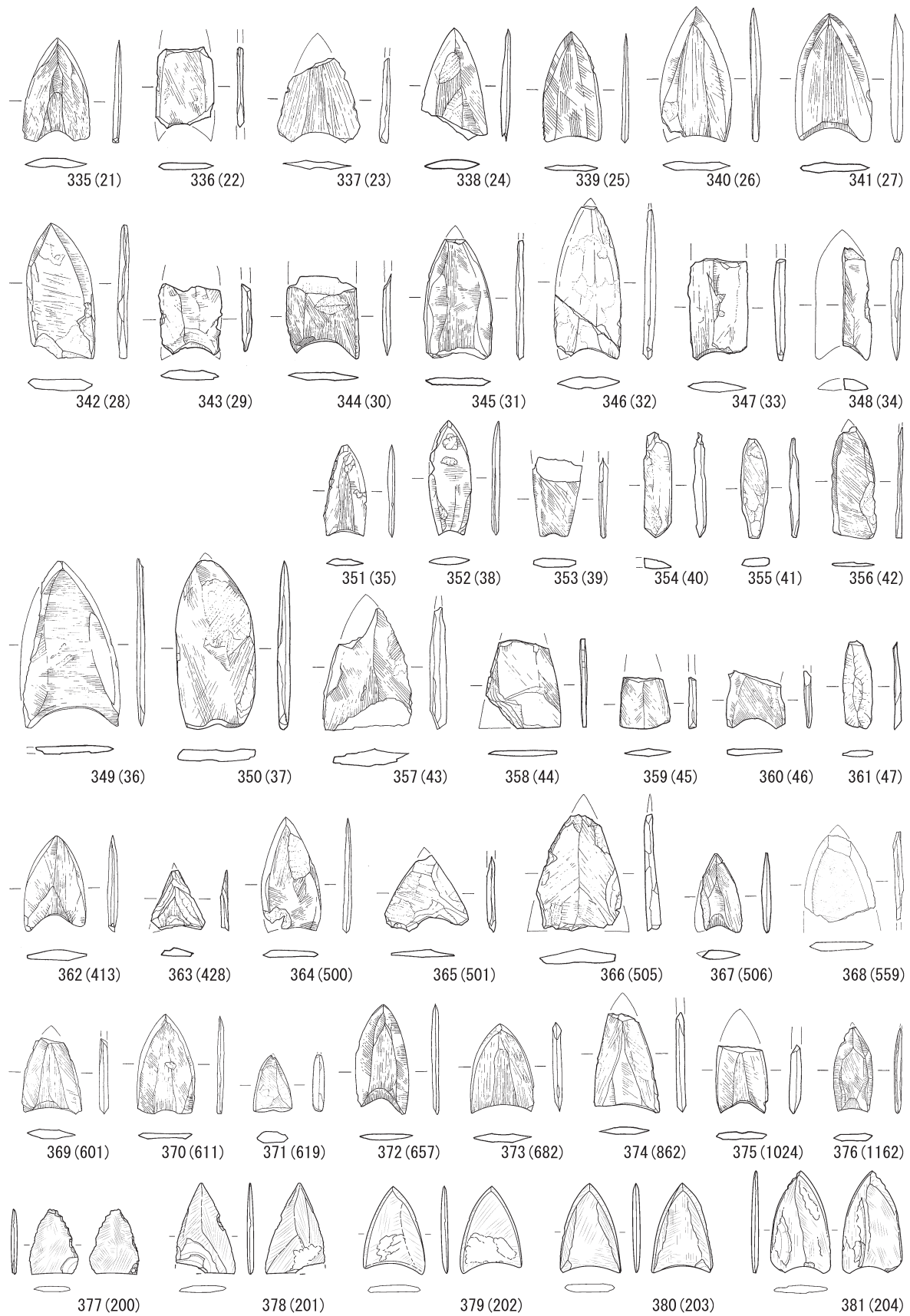
220～283：尾花A遺跡、284・285：西畦原第1遺跡

0 S=1/2 10cm

集成資料図5 (各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号)



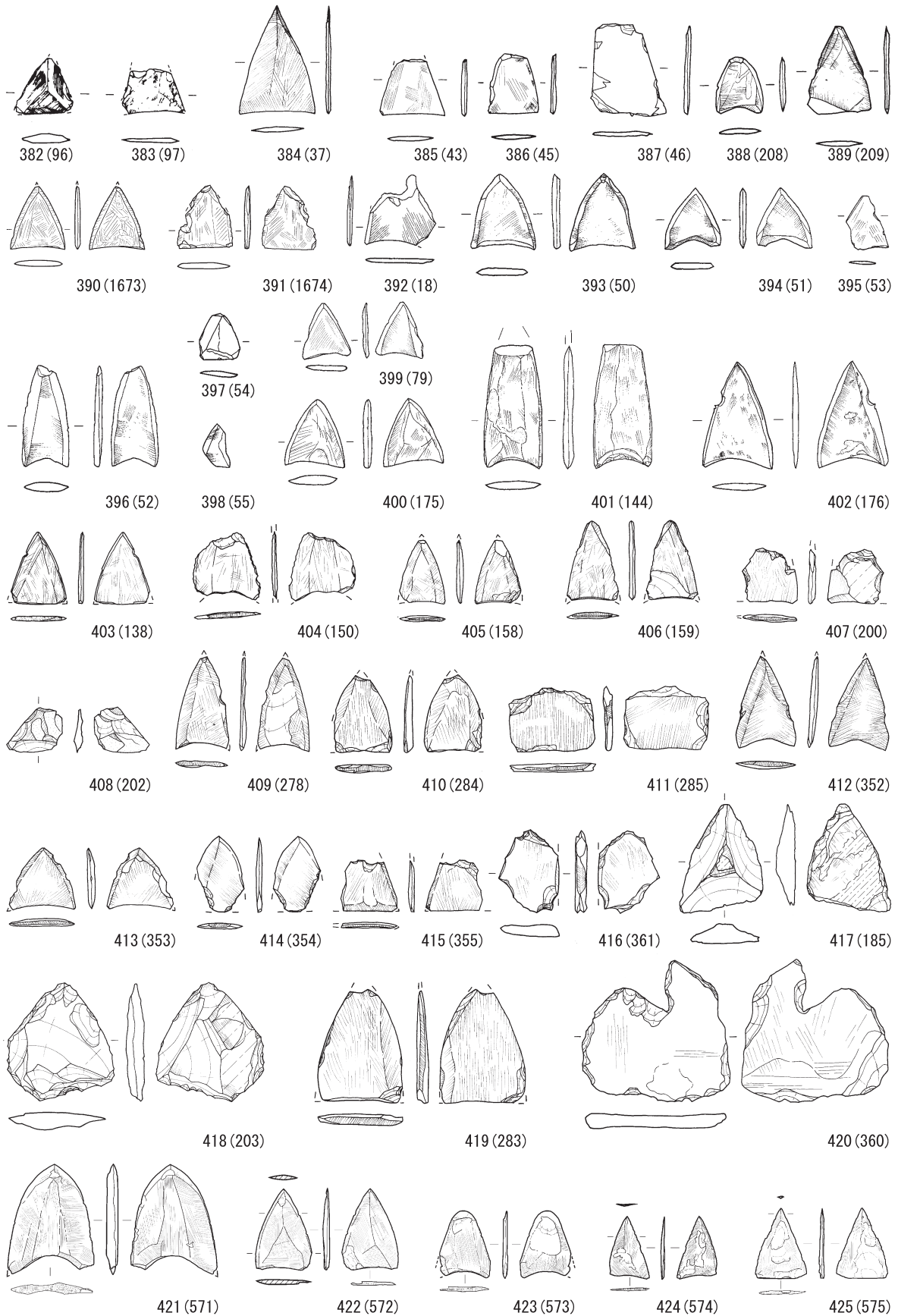
集成資料図6（各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号）



335～376：下那珂遺跡、377～381：大窪第1遺跡

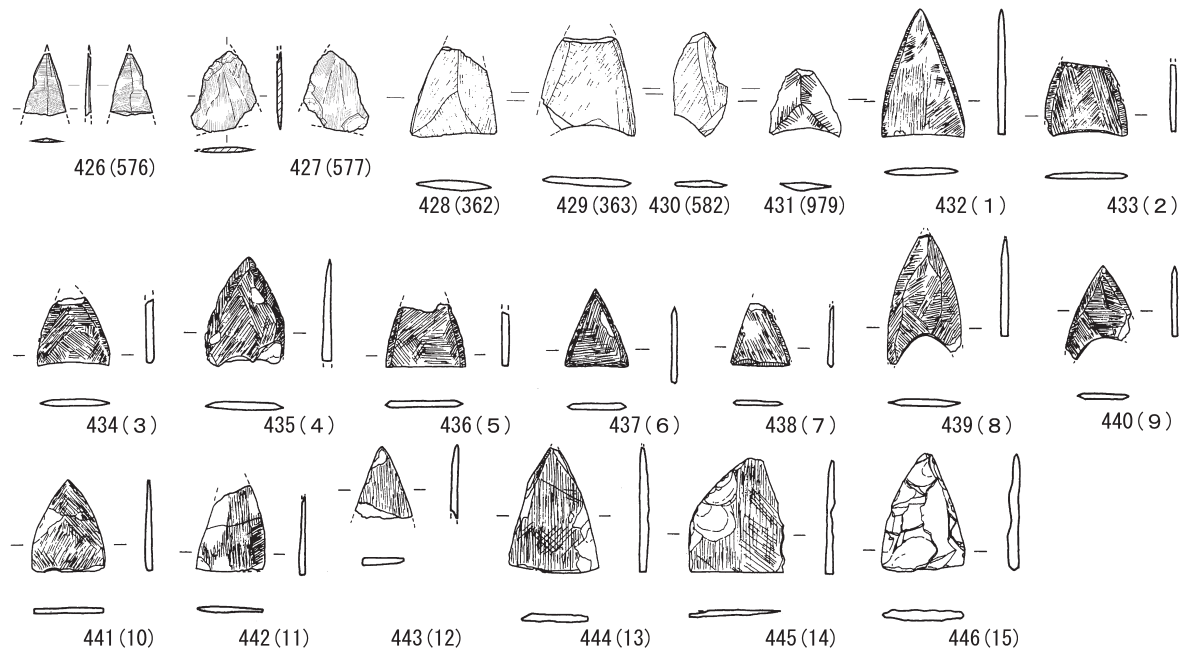
0 S=1/2 10cm

集成資料図7 (各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号)

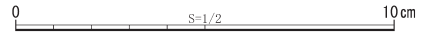


382・383：天神河内第1遺跡、384～389：下大五郎遺跡、390・391：大島畠田遺跡
 392～402：諸麦遺跡、403～420：働女木遺跡、421～425：大年遺跡

集成資料図8（各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号）



426・427：大年遺跡、428～431：荒迫遺跡、432～446：本地原遺跡



集成資料図9 (各報告書より改変、括弧内の数字は各報告書の掲載番号)

生駒遺跡（旧称）出土条痕文土器の年代について

菅付和樹

（宮崎県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

旧称生駒遺跡は、1992（平成4）年に県営広域営農団地農道（いわゆる広域農道）整備事業霧島北部地区の事業に伴い、宮崎県教育委員会が発掘調査した縄文時代の遺跡である。発掘調査は、平成4年12月14日から平成5年1月22日に実施された（750㎡）が、調査後1年あまり後に刊行された小林市教育委員会の『小林市遺跡詳細分布調査報告書』（平成4～5年度事業）では、天神山遺跡（遺跡番号No.2029）に遺跡名が変わっている。

遺跡は、標高1574mの高千穂峰に代表される霧島連山の夷守岳（1344m）の北側裾野に位置している。行政区では宮崎県小林市大字南西方字生駒である。市内を大淀川支流の岩瀬川に合流する石氷川が東流しているが、さらにその支流の巢之浦川の右岸、標高約384mのなだらかに傾斜した台地上に遺跡は立地している。

発掘調査では、縄文時代の遺物包含層から少量の綾B式・出水式土器や三万田式土器など後期土器のほか、中期の春日式土器や縄文地文の本野タイプ土器が出土した。また、貝殻条痕文地文の上に粘土紐をつまんで貼り付けたような貼付突帯文土器も出土している。

発掘調査直後は、この貼付突帯文土器について、貼付突帯や貝殻条痕の施文状況に多少の違いはあるものの土器のバリエーションの範囲内と考え、前期の轟B式土器と認識していた。その後、整理作業が終了しないうちに、当時の調査現場優先の諸事情から発掘調査報告書の刊行に至る前に当該事業が終了してしまい、調査概要の報告もなされないまま20年あまりが経過してしまった。

この間、当時、宮崎県下ではまだ出土例の少なかった春日式土器が当遺跡で出土していることが知られるようになり、鹿児島県の担当者が来県し土器を見学された際に、轟B式土器と認識していた土器に鹿児島県で「野久尾式」とされる土器が見られるという指摘を受けた（申し訳ないことに御教示いただいた方の氏名を失念してしまった。ここに改めて御礼申し上げます。）。

2013（平成25）年度に宮崎県では、置県130年記念埋蔵文化財資料活用推進事業として、それまで諸般の事情で発掘調査を行いながら報告書を刊行できなかった遺跡28遺跡について、遺物の整理作業と概要報告書の刊行を行った。当遺跡もこれを機に残った整理作業を完了させ、貝殻条痕文地文の貼付突帯文土器の再整理も行った。

再整理した結果、当該土器を縄文時代前期の轟B式土器（屈曲タイプ）と中期の野久尾式土器に細分して報告したところである（菅付 2014 「第14節 生駒遺跡」『置県130年記念 埋蔵文化財資料活用推進事業報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第232集、宮崎県埋蔵文化財センター、49～52頁（以下、『置県130年記念報告書』という））。

2 轟B式土器と野久尾式土器、細分は正しいのか

当遺跡では、上記の土器が厚さ30～50cmの遺物包含層から混在して出土している。図1は『置県130年記念報告書』の一部である。このうちの2～6を屈曲タイプの前期轟B式土器、7～15までを中期の野久尾式土器とした。いずれも地文に貝殻条痕文が見られ、器面には粘土紐を貼付している。

なお、16・17は貝殻条痕文の見られる尖底の底部で、条痕文が浅い（薄い）ことや轟B式土器の底部にしては丸底ではなく、ほかに深浦式土器も出土していないことなどから、おそらく野久尾式とした土器の底部ではないかと考えている。ちなみに18～23は、縄文地文のうゑに縄文施文あるいは無文の貼付突帯文を持つ本野タイプと呼ばれる中期の土器である。同一包含層か

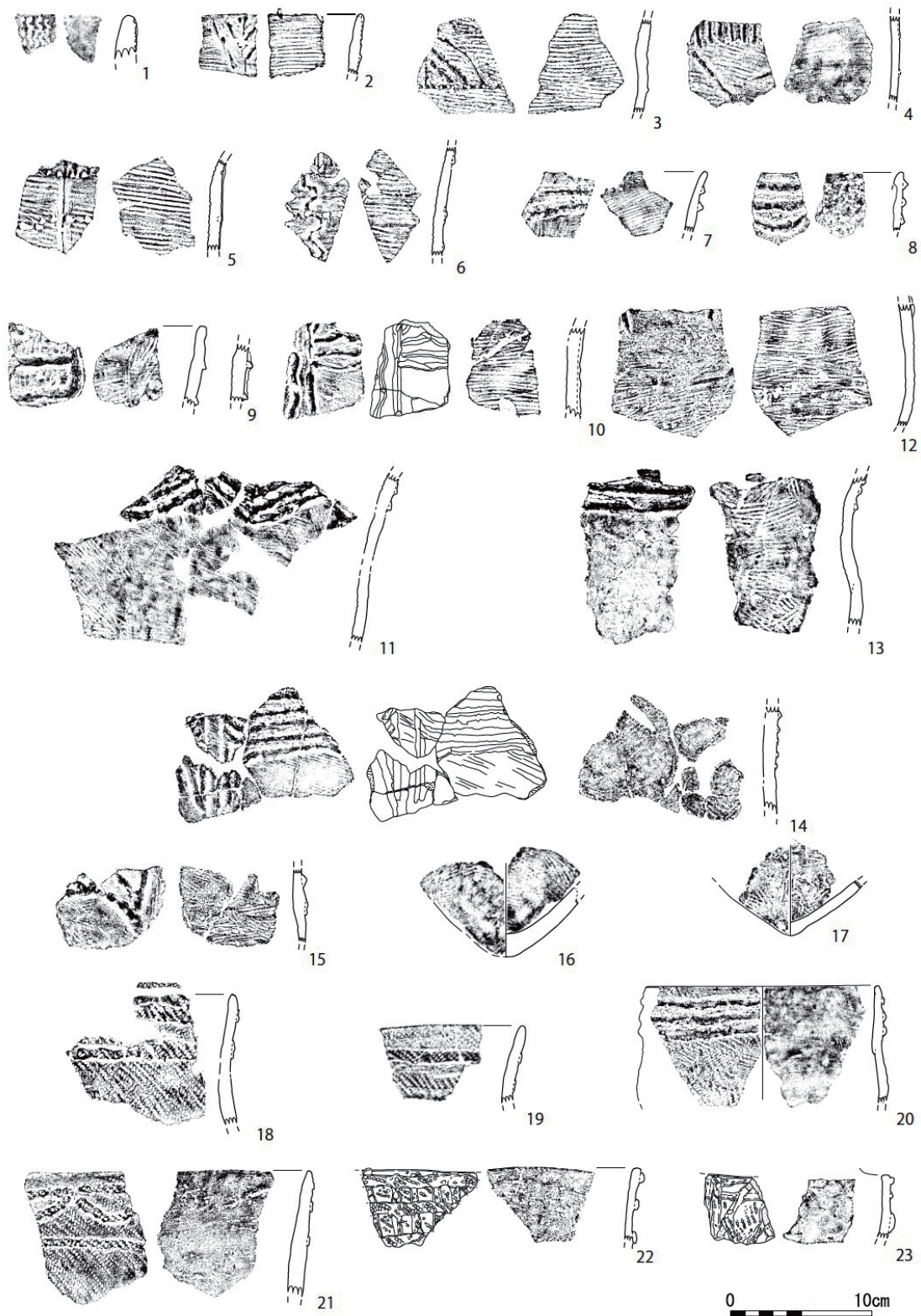


図1 生駒遺跡（旧称）出土縄文土器実測図（一部抜粋 縮尺任意）

ら縄文施文の尖底の底部も出土している（『置県 130 年記念報告書』第 58 図 25・26、52 頁）が、他に縄文施文の土器は船元Ⅲ式と見られる土器以外は出土していないため、この尖底の縄文施文の底部が本野タイプの底部の可能性があると考えられる。

細分は、型式の違いを意識して、地文の貝殻条痕文と突帯文の貼付け方から次のように行った。

轟B式とした土器には、ほぼ横位に施されたやや幅広（幅が一定）の明瞭な貝殻条痕文が見られる（通常の轟B式土器の粗くはっきりした貝殻条痕文ではないが、屈曲タイプにはよく見られる貝殻条痕文と思う）。貼付突帯文がミミズバレ状の細い突帯でしっかりと張り付いている。刻み目のある横位突帯文や横位の刺突文列が見られることなどで分類した。

一方、野久尾式土器としたものは、貝殻条痕文の幅や施文される方向が一定ではなく不規則で、しかも輪郭の不鮮明な浅い条痕文である。貼付突帯文は、やや太めの頂部に稜を持たない突帯で、突帯をつまみ上げて貼付け、貼付け方の緩い（弱い）ものが見られることなどである。

しかし、これらの細分の基準としたものはなほだ感覚的で曖昧さが残ることは承知しており、何とか土器自体で年代が捉えられないものかと常々考えてきた。ところが、これらのうち数点の土器表面に炭化物が付着していたことから、近年、土器付着炭化物の年代測定結果を多々報告している遠部 慎氏に御協力いただけることになり、上司の許可を得て土器付着炭化物の一部をC14年代測定分析に依頼した次第である。

測定結果については、次の遠部氏・宮田氏の報文に詳しいのでそちらで確認していただきたい。結果的に年代測定が実施できたのは各型式 1 資料ずつであった（図 1 の 3 と 12 の土器）。野久尾式土器とした 12 の土器は、かろうじて貼付突帯文が見られるもので、確実に野久尾式かと問われると多少自信はなかった。しかし、測定結果は 3 の土器よりも 900 年ほど新しく出て時期差が認められ、また、データの少ないながらこれまでに発表された測定事例とも時期的には両者ともに整合性がとれているようなので、細分は間違っていなかったとみて良いのではないかと思います。

最後に、今回、年代測定に御協力いただいた遠部 慎氏、宮田佳樹氏には心から感謝の意を表します。

生駒遺跡出土条痕文土器の年代測定

遠部 慎・宮田佳樹

(久万高原町教育委員会・金沢大学環日本海域環境研究センター)

1 はじめに

考古学の型式学的方法は、時間的な目盛りを導き出すうえで、極めて有効であるが、同時性の問題になると、数々の極めて困難な問題が存在する。そうした中で、共伴とされる事例を含め、限られた現象ないしは属性をもって、土器を対比させることが多く結果的に的外れな議論が展開されることが少なくない。それに対し、土器型式ごとの関連性などを考えるうえで、年代学的な見地から大まかな見通しを与えることは、1つの解決策である、と考える。

現在、九州地方における縄文時代の土器型式「深浦式」をめぐる多くの議論が存在しているが（相美2000、2006ab、2008、2009、2010、水ノ江1999、2012、矢野2005、2008、2010、山崎2012ほか）、それらについて筆者も研究会等でいくつかの発言をし（九州縄文研究会佐賀大会事務局 2011）、さらに分析事例を通じ一定の見通しを述べている。その中で、野久尾式土器については、1遺跡においていわゆる轟B式系土器群と、野久尾式土器とを個別に測定する作業は行っていない。また、筆者自身、関連する土器群について観察や再実験等を通じ、桐木耳取遺跡や、下耳切第3遺跡などのデータは、信頼度が低いと評価する立場であるため、1遺跡において両者の型式学的な違いに加え、年代学的な違いを明らかにする必要があった。以上が、本分析の動機である。

2 炭化物の処理及び結果

本研究で、分析対象としたのは宮崎県小林市生駒遺跡より出土した土器に付着した炭化物である（表1）。この炭化物の採取は遠部が行った。試料番号はMYMB-69～76である。

炭化物試料については、以下に記す手順で試料処理を行った。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目

表1 実験対象

試料 No	試料	対象	採取部位
MYMB69	3	土器付着炭化物	外面
MYMB70	4	土器付着炭化物	外面
MYMB71	12	土器付着炭化物	外面
MYMB72	13	土器付着炭化物	外面
MYMB73	18	土器付着炭化物	外面
MYMB74	20	土器付着炭化物	外面
MYMB75	24	土器付着炭化物	外面
MYMB76	36	土器付着炭化物	外面



図1 分析対象資料 (S=1/3)

0.1N、3回目以降1N) でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回以上行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理2回(1N-HCl 1時間)を行い、アルカリ分を除いた後、純水により洗浄した(4回)。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で、850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で、およそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合させた後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

(1)の作業は、金沢大学において宮田が行った。(2)(3)の作業はパレオ・ラボ社に委託し、測定はパレオ・ラボ(PLD)で行った。

測定結果は、以下に示す方法で、同位体効果を補正し14C年代、較正年代を算出した。

年代データの14C BPという表示は、西暦1,950年を基点にして計算した14C年代(モデル年代)であることを示す。14C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の14C/12C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した13C/12C比により、14C/12C比に対する同位体効果を調べ補正する。13C/12C比は、標準体(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの13C/12C比)に対する千分率偏差 $\delta^{13}C$ (パーミル, ‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる14C/12C比によって補正する。補正した14C/12C比から、14C年代値(モデル年代)が得られる。加速器による測定は同位体補正効果のためであり、必ずしも14C/13C/12C比を正確に反映しないこともあるため、加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線IntCal09(14C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版)

(Reimer et al 2009) と比較することによって暦年代 (実年代) を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCa1 (OxCal Programに準じた方法) を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BCで示す。() 内は推定確率である。

3 結果

以下に実験結果を示す (表2)。MYMB69および71からは測定可能な炭素が回収できたが、その他からは得られなかった。MYMB74は胎土と考えられたため、測定を行わなかった。そのため、MYMB69および71の年代測定を加速器 (AMS) で行った。AAA処理の回収量は決して高くないが、ガス化についてはMYMB34が34%、MYMB71が59%であり、決して状態は低くないと判断した。得られた結果を示す (表3、図2)。

表2 採取資料の実験状況

試料 No	採取量	AAA 処理後	ガス化重量 (mg)	回収	CO2 量 (mgC)	備考
MYMB69	43.9	2	1.08	0.34	31.6	
MYMB70	0	0				
MYMB71	105.6	2.5	1.33	0.59	44.4	
MYMB72	3.4	0				
MYMB73	0	0				
MYMB74	29.1	11.3				胎土か?
MYMB75	11.4	0				
MYMB76	17.9	0				

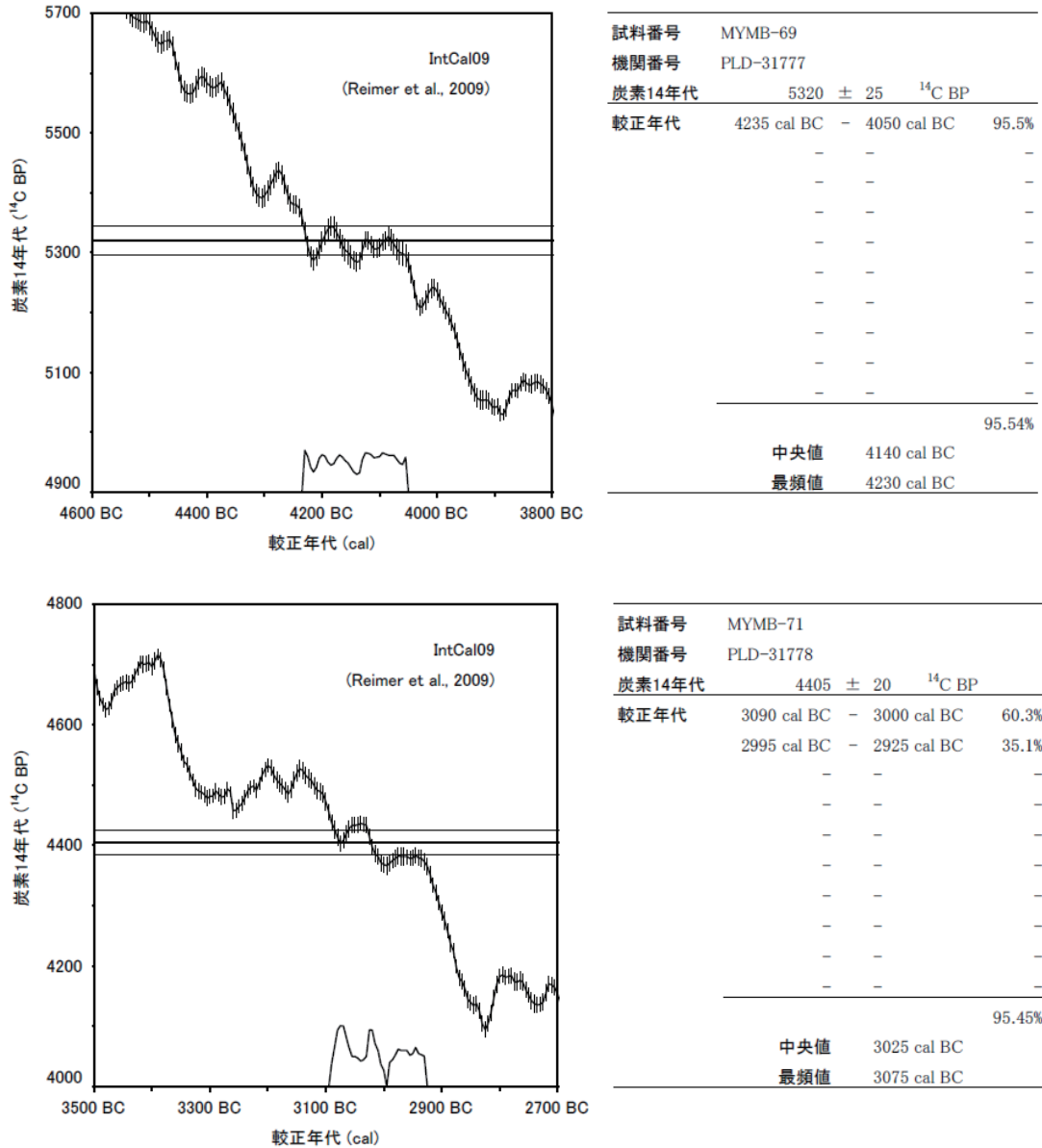


図2 MYMB-69、71の較正曲線

表3 測定値と較正年代

試料 No	Lab-Code	14C 年代 (BP)	$\delta 13C$ (‰)	較正年代 (cal/BC)
MYMB-69	PLD-31777	5320 ± 25	36.42 ± 0.12	4325-4060 (95.5%)
MYMB-71	PLD-37778	4405 ± 20	28.06 ± 0.12	3090-3000 (60.3%) 2995-2925 (35.1%)

4 考察

以上、本測定結果から得られたこと、およびこれまでの年代測定の検討結果から、以下のことを指摘しておきたい。年代が得られた土器は、土器型式でいえば、高橋信武のいう西川津3式：

5320±25bp (51図3)、野久尾式：4405±20bp (51図12) であった (図3)。

いわゆる轟B式と野久尾式はみため上、類似している土器群であることは、近年指摘されるようになってきたが、隆帯の形状などの違いで識別は可能である。本研究では、1遺跡内で識別可能な轟式と野久尾式の年代測定を行い、測定点数は少ないものの、適切なAAA処理を行ったうえで得られた結果から、両者に有意な差があることが認められた。

そこで、これまでに筆者らが分析したデータをもとに考察を行っていきたい。いわゆる轟B式については、鹿児島県三角山遺跡で3式5770±45BP (MTC-05832) (小林ほか2005、小林2007)、福岡県上伊良原榎遺跡の轟4式が5225±40BP (MTC-11327：-26.1±2.0‰)、二日市洞穴の轟4式 (PLD-6725) が5160±20BPであることと矛盾しない (遠部ほか2008)。

宮崎県都城市星原遺跡で行った深浦式の測定値と本研究は整合的であり (遠部2012)、鹿児島県を中心に野久尾式についても分析を行っているが、4585±20BP、4510±20BPと本研究とも整合的な年代測定値を示し (国立歴史民俗博物館・炭素14年代測定グループ2006)、後続するとされる春日式前谷タイプ (前谷段階) の土器付着炭化物の測定値 (4295±20BP) とも矛盾しない (遠部・相美投稿中)。



図3 年代値の得られた土器 (S = 1/3)

5 まとめ

本研究において、轟B式および野久尾式の1遺跡における年代学的な分析を行った。測定例は本遺跡においては1点ずつのみであるが、有意な差異が認められた。本分析は年代について基礎的なデータの提示を主目的として行ったため、型式論や校正等を含んだ議論は行っておらず、それらについては稿を改めたい。

今後は条痕文土器群を積極的に区分し、各遺跡の事例を検討していく必要があるだろう。ただし、九州地方において、中期前半に分布する船元式土器群の年代測定は古くからほとんどなく (ギダー・小山1967、キーリ・武藤1982、坂田1980、新東1986、高瀬・徳永1994)、深浦式、野久尾式とともに、今後事例の蓄積が望まれる。

宮崎県内において、筆者が縄文時代中期について、①層位的に検証可能な深浦式 (星原遺跡)、②1遺跡において類似する轟式および野久尾式の分析を行った (本研究) ことになる。これまでの前後する土器群の検討 (遠部・宮田2008ab、小林2009) など含め、大きく矛盾するものではないと判断している。今後も関連する土器群について、検討を重ねていくことで、議論を深めていきたい。こうした検討は、単に土器型式と年代値の整合性のみでなく、最終的には遺跡の評価へとつながる問題と考える。さらに問題を単純な「測定数」の問題に置き換えるのではなく、遺跡調査を含めた質の議論への転換をはかっていきたい。

謝辞

本分析にあたり、資料の提供から原稿作成に至るまで、宮崎県埋蔵文化財センター、特に菅付和樹氏には大変お世話になった。小林謙一、相美伊久雄、松本茂、矢野健一の諸先生、諸氏には本稿作成において数々の議論にお付き合い頂いた。なお、本研究は第69回日本人類学会（2016年）で行った発表の一部である。「科学分析手法と土器使用痕観察を組み合わせた古食性と調理形態復元に関する学際的研究」（代表者宮田佳樹）および「炭素14年代測定による縄文文化の枠組みの再構築-環境変動と文化変化の実年代体系化」（小林謙一）などの成果の一部を含む。

引用・参考文献

- 小元久仁夫・竹石健二・堂込秀人 2012 「西日本の5遺跡から採取した貝殻試料の放射性炭素年代と較正年代-較正年代による遺跡の編年-」『史叢』87、pp. 106-128、日本大学史学会
- 遠部 慎 2012 「都城市星原遺跡の土器付着炭化物の炭素14年代測定-深浦式の年代測定-」『宮崎考古』22、pp. 5-10、宮崎考古学会
- 遠部 慎・相美伊久雄 2017 投稿中 「志布志市内の縄文時代中期土器付着炭化物の炭素14年代測定-野久尾式土器の実年代-」
- 遠部 慎・宮田佳樹 2008a 「宮崎県における土器付着炭化物の炭素14年代測定-縄文時代前半期を中心に-」『宮崎考古』21、pp. 41-54、宮崎考古学会
- 遠部 慎・宮田佳樹 2008b 「鹿児島市湯屋原遺跡の土器付着炭化物の炭素14年代測定」『鹿児島市立ふるさと考古歴史館年報 平成19年度版』pp. 31-39、鹿児島市立ふるさと考古歴史館
- 遠部 慎・宮田佳樹・小林謙一 2008 「近畿地方におけるアカホヤ前後の縄文土器付着炭化物の年代測定」『古代文化』第59巻第4号、pp. 42-57、古代学協会
- キーリ・C. T. ・武藤康弘 1982 「縄文時代の年代」『縄文文化の研究』1、pp. 246-275、雄山閣出版
- 九州縄文研究会佐賀大会事務局 2011 「第20回佐賀大会の記録」『九州における縄文時代後期前葉の土器』第21回九州縄文研究会宮崎大会発表要旨・資料集、pp. 556-573、九州縄文研究会
- 桑畑光博 2016 『超巨大噴火が人類に与えた影響』雄山閣
- 国立歴史民俗博物館・炭素14年代測定グループ 2006 「鹿児島県中ノ原遺跡の14C年代測定」『中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(102)、pp. 99-102、鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 小林謙一 2009 「鹿児島県における縄文時代後半期の年代測定事例」『南の縄文・地域文化論考』pp. 151-171、南九州縄文研究会
- 小林謙一・尾埴大真・新免歳靖・遠部慎・松崎浩之 2005 「平成17年度鹿児島県三角山I遺跡出土土器付着物の14C年代測定」『三角山遺跡群(3)(三角山I遺跡)第2分冊 縄文時代早期以降編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96) pp. 300-304、鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 小林謙一編 2007 『AMS炭素14年代測定を利用した東日本縄文時代前半期の実年代の研究 平成17年～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書(課題番号:17520529)』国立歴史民俗博物館
- 坂田邦洋 1974 『曾畑式土器に関する研究 尾田貝塚』縄文文化研究会
- 坂田邦洋 1980 「九州の縄文早・前期土器の編年」『史学論叢』11、pp. 121-174、別府大学史学研究会
- 相美伊久雄 2000 「深浦式系土器の再検討」『人類史研究』12、pp. 179-203、人類史研究会
- 相美伊久雄 2006a 「南九州における縄文時代中期初頭～後葉の土器様相」『鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集』pp. 45-61、鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会
- 相美伊久雄 2006b 「条痕文土器と縄文施文土器-南九州における縄文時代前期末～中期前葉土器群の再整理-」『大河』8、pp. 43-58、大河同人
- 相美伊久雄 2008 「深浦式土器」『総覧縄文土器』pp. 516-521、総覧縄文土器刊行委員会
- 相美伊久雄 2009 「深浦式土器」『鹿児島の縄文時代中期土器』pp. 1-12、南九州縄文研究会
- 相美伊久雄 2010 「九州南部における中期前葉土器の現状と課題」『九州の縄文時代中期土器を考える』第20回九州縄文研究会佐賀大会発表要旨・資料集、pp. 11-24、九州縄文研究会

- 相美伊久雄 2011「南九州の鷹島式土器・船元式土器」『南九州縄文通信』21、pp.1-27、南九州縄文研究会
J.E. キダー・小山修三 1967「C 14 年代からみた縄文時代の編年」『上代文化』37、pp.1-6、國學院大學
考古学会
- 新東晃一 1986「周辺科学との関連」『鹿児島考古』20、pp.65-74、鹿児島県考古学会
- 高瀬哲郎・徳永貞紹 1994「九州地方の縄紋中期土器編年と14C年代」『名古屋大学加速器質量分析計業
績報告書』V、pp.75-80、名古屋大学年代測定資料研究センター
- 高橋信武 1989「甕式土器再考」『考古学雑誌』75-1、pp.1-39、日本考古学会
- 高橋信武 2004「西川津式土器と甕式土器の関係」『山下秀樹氏追悼考古論集』pp.190-200、山下秀樹氏追
悼考古論集刊行会
- 田辺哲夫・坂田邦洋 1981「尾田貝塚-熊本県玉名郡天水町尾田における縄文前期・中期貝塚の研究」『史
学論叢』12、pp.25-169、別府大学史学研究会
- 水ノ江和同 1999「九州地方 中期」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会 254-264 頁
- 水ノ江和同 2012『九州縄文文化の研究』同成社
- 都城市教育委員会 2006『横市地区遺跡群 星原遺跡』都城市文化財発掘調査報告書 (72)
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (125)
- 矢野健一 2005「九州南部における縄文時代中期前葉の土器編年」『立命館大学考古学論集』IV、pp.1-
*14、立命館大学考古学論集刊行会
- 矢野健一 2008「縄文中期における船元式の九州南部への波及」『吾々の考古学』pp.49-66、和田清吾先生
還暦記念論集刊行会
- 矢野健一 2010「九州縄文中期土器編年論争の本質」『九州の縄文時代中期土器を考える』第20回九州縄
文研究会佐賀大会発表要旨・資料集、pp.37-46、九州縄文研究会
- 山崎真治 2012「船元式土器の分類と編年(I)」『関西縄文論集』3、pp.73-92、関西縄文文化研究会
- Minami M., Yamazaki K., Omori T., and Nakamura T. (2013) Radiocarbon dating of VIRI bone samples
using ultrafiltration. Nucl. Instr. and Meth. in Phys. Res, B294, pp240-245
- Reimer, Paula J. et al. (2004) IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP
Radiocarbon 46(3), 1029-1058(30).
- Stuiver M., Reimer P.J., Bard E., Beck J.W., Burr G.S., Hughen K.A., Kromer B., McCormac F.G.,
v.d.Plicht J., and Spurk M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age Calibration, 24,000-0 cal
BP. Radiocarbon40(1), 1041-1083.
- Reimer P.J., Baillie M.G.L, Bard E., Bayliss A., Beck J. W., Blackwell P.G., Bronk Ramsay C.,
Buck C., Burr G.S., Edwards R.L., Friedrich M., Grootes P.M., Guilderson T. P., Hajdas
I., Heaton T.J., Hogg A.G., Hughen K.A., Kaiser K.F., Kromer B., McCormac G., Manning S.,
Reimer R.W., Richards D.A., Southon J.R., Talamo S., Turney C.S.M., van der Plicht J.,
Weyhenmeyer C E. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon Calibration curves, 0-50,000
years calBP. Proceedings of 20th International Radiocarbon conference. RadioCarbon 51,
1111-1150.
- Reimer P.J., Bard E., Bayliss A., Beck J.W., Blackwell P.G., Bronk Ramsey C., Buck C.E., Cheng
H., Edwards R.L., Friedrich M., Grootes P.M., Guilderson T.P., Haffidason H., Hajdas
I., Hatte C., Heaton T.J., Hoffmann D.L., Hogg A.G., Hughen K.A., Kaiser K.F., Kromer
B., Manning S.W., Niu M., Reimer R.W., Richards D.A., Scott E.M. Southon J.R., Staff
R.A., Turney C.S.M., and van der Plicht J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age
Calibration Curves 0-50,000 Years calBP. Radiocarbon55(4), 1869-1887.

図1.2および表1～3 筆者作成

宮崎県内で出土した縄文時代晩期系浅鉢形土器の一例

吉本正典

(宮崎県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

本稿は、当センター刊行の発掘調査報告書に掲載されている縄文時代晩期系の浅鉢形土器⁽¹⁾について紹介し、補足的なデータを掲載した上で、それらの位置づけに関して若干の考察を行うものである。

2 対象資料

図2-1は、都城市高崎町（調査時は北諸県郡高崎町）前田地区所在の鳥越前遺跡より出土した土器である。

鳥越前遺跡は、都城盆地北部の丘陵上に立地する遺跡で、宮崎県教育委員会が国道221号線改良工事に伴って1990年に実施した発掘調査の結果、縄文時代晩期の土坑が3基検出されている（宮崎県埋蔵文化財センター2014：p.69）。土坑のうちの1基は、断面が袋状となっており、その形状から貯蔵穴と推定される。縄文時代晩期系土器は、それとは別の楕円形を呈する土坑（「2号土坑」：図1）の検出面近くのレベルで完全に近い状態で出土している⁽²⁾。

検討対象の図2-1は、薄手で平底の浅鉢である。復元口径19.3cm、器高は10.0cmで、口縁部の下位で逆「く」字形に屈曲し、胴部は緩やかな弧を描いて底部に至る。口縁部の外面には鈍い段が形成され、玉縁状を呈するが、ところによっては浅い沈線状の凹部となる。そのような形状は、口縁部文様帯の痕跡と考えられる。口縁上端部には、縄文時代晩期土器の特徴たる鱗状突起が付されている。鱗状突起は、おそらくは3箇所⁽³⁾に配されており、それが口縁上端部の円周上に等間隔にあるのではなく、片側の半円弧上のみ⁽⁴⁾に付され、他方の半円弧上にはないという非対称的な配置となっている。器面の調整は、口縁部は横方向、胴部は斜め方向のミガキが施されている。なお、実測図に関しては、今回の検討にあたって、鱗状突起の形状が確認できるように、報告書掲載図（宮崎県埋蔵文化財センター2014：p.69）を一部改変して再掲した。

この鳥越前遺跡資料の類例として、高鍋町老瀬坂上第3遺跡の出土資料（図2-2）が挙げられる（宮崎県埋蔵文化財センター2005：p.80）。老瀬坂上第3遺跡は、宮崎平野北部を流れる小丸川の右岸に立地している。台地縁辺の斜面に堆積した遺物包含層より縄文時代晩期土器（18～20類）が出土しており、2は晩期の精製磨研土器である「18類」に属するものと報告されている。1と比べて口縁部屈曲部の屈曲角がより大きく（曲がり⁽⁵⁾が鈍く）なる点は異なるものの、鱗状突起が口縁部の片側半円弧上⁽⁶⁾のみ⁽⁷⁾に配置される点や、ミガキによる器面調整、焼成・色調、口径・器高など、類似点が多い。口径は18.6cmで、1とほぼ同様の大きさである。両者とも、胴下半の器面調整が縦方向のミガキとなる⁽⁸⁾点に注目したい。

3 考察

上述の2個体は、口縁部下位の屈曲角度の鈍化など、2の方により新しい型式的傾向が認められる。それらの細かな編年的位置に関して、老瀬坂上第3遺跡における比較的良好的な出土状況（口縁部の立ち上がりが短く、胴部の屈曲が鈍い浅鉢+孔列土器鉢）をもとに考えるならば、九州地

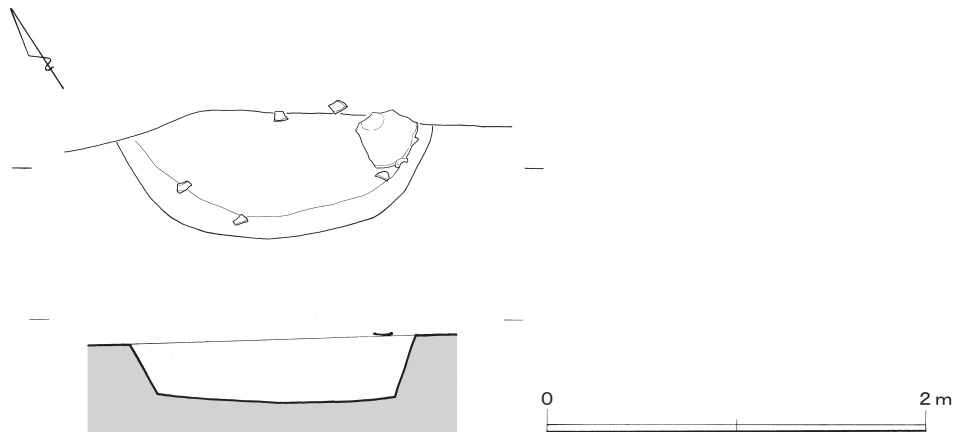


図1 鳥越前遺跡2号土坑 (1/40)

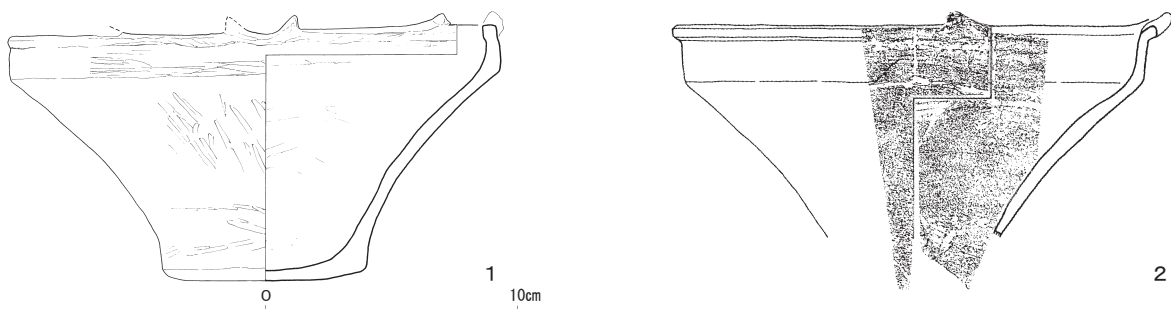


図2 縄文時代晩期系土器

域の縄文時代晩期土器様式の黒川式新段階に属する可能性が高い。

これらの型式的な系譜については、口縁部文様帯の痕跡と理解可能な口縁端部のつくりから黒川式の浅鉢との関連を考えたいが、胴部は窄まるようなカーブを描き、底部は平底となるなど違いも大きい。黒川式新段階から、浅鉢は変化が緩慢となり、粗製化の傾向が認められる(田中1986)が、今回紹介した2例はミガキを施す比較的丁寧な器面調整がなされており、黒川式新段階の浅鉢とは一線を画している。加えて、底部の形態や胴下部のカーブは近畿地方の口酒井遺跡第15層出土土器群(泉1986)など初期の刻目突帯文土器期のセットに含まれる逆「く」字形屈曲浅鉢との関連性を観取することができる。1・2の所属時期が先に比定したとおりであるならば、逆「く」字形屈曲浅鉢より時期的に遡ることになるが、系譜の問題については類例の増加を待って慎重に検討したい。

4 おわりに

今回は、縄文時代晩期系の浅鉢の中でも類例の少ない個体を取り上げ、刻目突帯文土器期にみられる浅鉢との関連について若干の指摘を行なった。

筆者はかつて、黒川式系浅鉢の出土状況とその意味について考えたことがある(吉本2014)。当遺跡では、浅鉢のみがまとまった形で土坑埋土の上～中位から出土しており、そのようなあり方は、不確実ながら何らかの儀礼的行為の痕跡と推定される。また、刻目突帯文土器に伴う浅鉢は、「弥生化していく社会システム」に対する縄文集団側の抵抗を象徴するもので、その減少は土偶や石棒といった縄文時代の祭具の減少と一連の動きであるとされる(藤尾1991)。縄文時代晩期系浅鉢の提起する問題は多岐にわたっている。

註

- (1) 当該箇所以外では、土器の器種を示す「～形」を省いている。
- (2) この2号土坑の図面は初出である。1の土器の出土状況を知るために、調査担当者から情報提供を得て、ここに公表するものである。

参考文献

- 泉 拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』8 奈良大学文学部文化財学科
- 田中良之 1986 「1. 西日本」『弥生文化の研究』3 雄山閣
- 藤尾慎一郎 1991 「水稻農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』（横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ）
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『老瀬坂上第3遺跡』（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書118）
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2014 『埋蔵文化財資料活用推進事業報告書』（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書232）
- 吉本正典 2014 「黒川式浅鉢考」『Archaeology from the South II 新田栄治先生退職記念論文集』新田栄治先生退職記念事業会

異形鉄器小考

―大窪第1遺跡出土の不明鉄器について―

和田理啓

(宮崎県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

南九州の古墳時代において異形鉄器と呼ばれる一群の鉄製利器がある。大きさ、形状などは一定せず、その奇妙な形状から一括して「異形」鉄器と呼称されてきた。

古くは、宮崎県小林市松之元での出土例（乙益重隆1974）が知られ、その後、鹿児島県山川町（現指宿市）の成川遺跡で集中して出土したことから注目された。

その後、まとまった論考は特に見当たらなかったが、近年になって鹿児島大学総合研究博物館が中心になって行った鉄器集成（橋本達也・藤井大祐2007）の中で検討が行われている。

本稿では、今回、都城市大窪遺跡の包含層から出土した不明鉄器を異形鉄器ととらえ資料紹介を兼ねて検討したい。

2 定義と分布

「異形鉄器」と呼ばれる鉄製利器は、大きさ、形状ともにバラエティーに富んでいる。一見したところ、あまり一般的でない形状をしている利器が、南九州、特に成川遺跡で集中して確認されたことから、明確な定義なくその総称のように用いられているのが現状であろう。

ここでは「異形鉄器」を大まかに次のように定義したい。

- ① 剣や鍬に相当するような利器である
- ② 茎部に相当する部分の形状が一般的な剣や鍬に比して特異である

これまでの出土地域は現状では日向南部（諸県地域）から薩摩大隅地域に限られている。本県内では宮崎県小林市松之元地下式横穴墓から1点である。

鹿児島県域では、指宿市（旧山川町）成川遺跡で7点、曾於郡大崎町下堀2号地下式横穴墓より1点、町田堀遺跡では4基の地下式横穴墓から6点の出土が知られる。そのほか報告書の刊行前で詳細が不明であるが立小野堀遺跡の地下式横穴墓からの出土も知られている（新屋敷2015）。

先述した定義および、これまで「異形鉄器」として報告されている例なども含め、大窪第1遺跡例での2点は異形鉄器としてとらえて、大きな問題はないと考えたい。

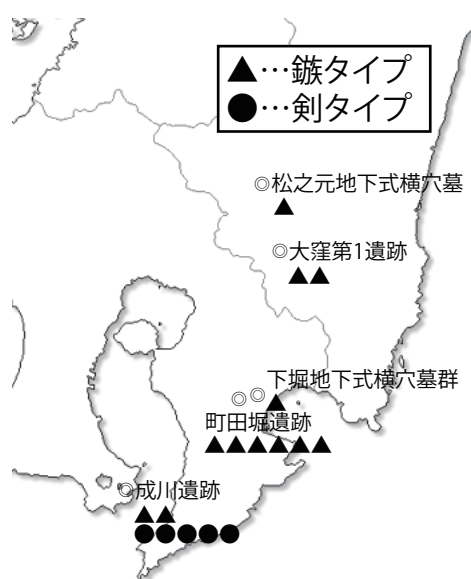


図1 異形鉄器の分布

資料No.	出土遺跡	所在地	遺構	タイプ
1	大窪第1遺跡	宮崎県都城市高城町有水	包含層	鍬1類b
2	大窪第1遺跡	宮崎県都城市高城町有水	包含層	鍬2類a
3	松之元地下式横穴墓	宮崎県小林市大字堤字松之元	地下式横穴墓	鍬1類a
4	成川遺跡	鹿児島県指宿市山川町	土壙墓?	剣1類
5	成川遺跡	鹿児島県指宿市山川町	土壙墓?	剣1類
6	成川遺跡	鹿児島県指宿市山川町	土壙墓?	剣2類
7	成川遺跡	鹿児島県指宿市山川町	土壙墓?	剣2類
8	成川遺跡	鹿児島県指宿市山川町	土壙墓?	剣2類
9	成川遺跡	鹿児島県指宿市山川町	土壙墓?	鍬2類a
10	成川遺跡	鹿児島県指宿市山川町	土壙墓?	鍬3類
11	下堀地下式横穴墓群	鹿児島県曾於郡大川町	2号地下式横穴墓	鍬1類a
12	町田堀遺跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	12号地下式横穴墓	鍬2類a
13	町田堀遺跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	18号地下式横穴墓	鍬2類a
14	町田堀遺跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	26号地下式横穴墓	鍬2類b
15	町田堀遺跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	26号地下式横穴墓	鍬1類b
16	町田堀遺跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	58号地下式横穴墓	鍬1類b
17	町田堀遺跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	58号地下式横穴墓	鍬2類a

3 分類

以下で異形鉄器と総称されている利器について分類を行い、以後の検討の基礎作業としたい。

(1) 大分類と各部名称

一見して、その大きさから分類が可能であると考えられる。橋本(2007)は、「鍬タイプ」と「剣タイプ」に分類を行っているが、その基準を明確化するために、全長の分布表を作成した。

表2から、おおまかに両タイプは全長17~18cmを境にそれ以上のものが剣タイプ、それ以下のものが鍬タイプと呼ぶことができそうである。

a. 鍬タイプ (図4)

鍬タイプは形状のバリエーションが多く分類に苦慮するが、ここでは下記のように分類する。1類各部の呼称については図のとおりとする。その他は属の各部名称に準ずる。

・鍬タイプ1類(3・11・⁽¹⁾)・・・脚部を有し、根挟み状に矢柄と接続するもの。脚部の形状により閉じるタイプのa類(3・11)、開くタイプのb類(15・16)に分類する。

・鍬タイプ2類・・・脚、茎部を有さない無茎鍬状のもの。2類は木の葉型の平面形態をなすものをa類(9・12・13・17)、その他(14)をb類とした。

・鍬タイプ3類(10)・・・茎部を有すもの。現状、成川遺跡例の1点のみである。鍬タイプは、矢柄との装着状態を想定した場合、平根系の無茎鍬のようになる2類と透かし孔を持つ三角形鍬のようになる1類、3類に別れそうである。1類、3類については透かし孔を持つ三角形鍬を指

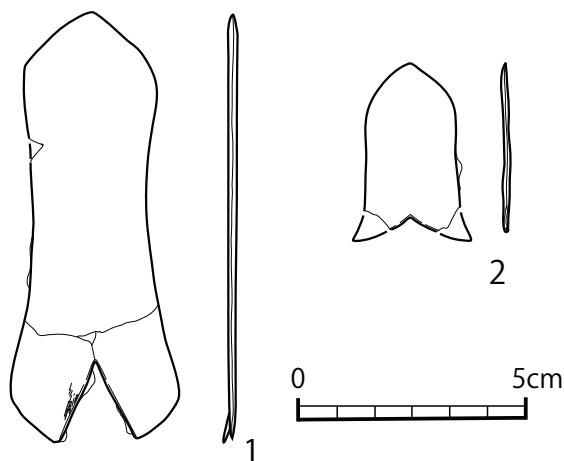


図2 大窪第1遺跡出土の異形鉄器 (S=1/2)

向したものととらえたい。

b. 剣タイプ (図4)

剣タイプは現状成川遺跡からのみ出土が知られる。各部位は図4のとおりとする。

脚部の形状から2種に分類が可能である。

- ・ 剣タイプ1類・・・脚部が先端に向かい閉じていくもの
- ・ 剣タイプ2類・・・脚部端が開くもの

1類が2類より全長が大きくなる傾向があるようであるが、これは柄との接合方法によるものと考えられる。

表2 異形鉄器の全長とタイプ

資料 No.	長さ (cm)													
	≦ 6	6 ≦ 9	9 ≦ 12	12 ≦ 15	15 ≦ 16	16 ≦ 17	17 ≦ 18	18 ≦ 19	19 ≦ 20	20 ≦ 21	21 ≦ 24	24 ≦ 27	27 ≦ 30	
1			■											
2	■													
3						●								
4														■
5														
6										■				
7						■								
8							●							
9			■											
10								■						
11						●								
12					■									
13		●												
14										■				
15				■										
16			■	■										
17			■											

●は推定長 ■は鍬タイプ ■は剣タイプ

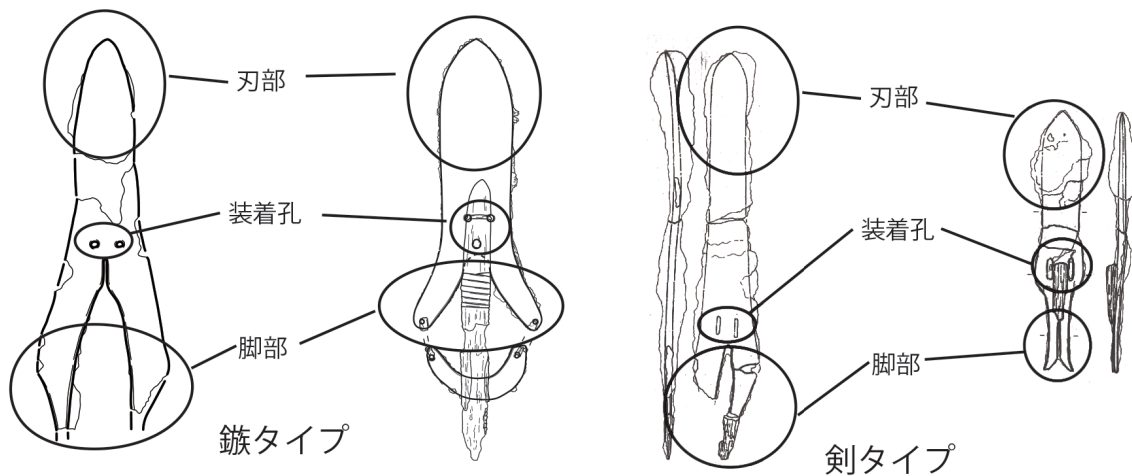


図3 異形鉄器の各部名称

4 性格

異形鉄器は大窪第1遺跡例を除くと全て古墳時代中期と考えられる墓からの出土であり、該期の葬送儀礼に伴う祭祀具ととらえるのが妥当だろう。

また、これまでの例から、2類以外の鍬タイプの異形鉄器は、想定される矢柄を装着した形態から、透し孔を有する三角形鍬を指向している可能性が高いと考えたい。町田堀遺跡出土例は別造りの部品を矢柄に差し込み、本体と紐状の部品によって接合することでそのような形態を指向したと考えられる。

鍬身部に透かし孔を穿つことが技術的な問題ではなかったことは、成川遺跡に鍬3類があることにより証明されており、想定のは非も含めた検討は今後、必須の作業となるだろう。

鍬2類については、形状的には大きく無茎鍬から外れることはないが、一般的な無茎鍬より概して大型である。また、矢柄を装着するための穿孔の数が一般的な無茎鍬より多く独特であることや、矢柄との接点に抉りがあること、逆刺を持たないことなども特徴といえるかもしれない。

剣タイプに関しては、現状では成川遺跡の出土例しか知られておらず、詳細な検討は困難であるが、剣1類と2類は脚部の形状のほか、やや2類が小型であるかのような印象を受ける。検証はかなり困難であるが、あるいは「剣」と「槍」などの違いがあったかもしれない。

以上のように見た場合、大窪第1遺跡出土例は、墓からの出土ではない点、鍬1類としたものが単体では、透し孔を有する三角形鍬状にはならない点、2類に分類したものが、穿孔を持たず、欠損しているが逆刺をもつ可能性が高い点など、細かな相違点があげられる。

大窪第1遺跡からは、鞆の羽口などを出土している5世紀代の住居址もあり、相違点も含め、これらが供給前の未成品である可能性も視野に入れる必要性もあるかもしれない。

5 終わりに

以上、大窪第1遺跡出土の不明鉄器を「異形鉄器」ととらえ、異形鉄器に関する若干の検討を行った。現状、5遺跡17点と非常に希少な遺物であり、断定的に述べることはできないが、古墳時代中期の九州南部に特異な葬送用の儀器である可能性が高い⁽²⁾と考えた。また、鍬1類、3類については透し孔を持つ三角形鍬を指向している可能性も考えられ、同様の鍬を副葬する被葬者との比較も必要となろう。このような事実の背景として、共通の祭祀を行う集団の存在を想定することも可能だろう。

大窪第1遺跡の例は包含層からの出土であり、その評価は難しいが、異形鉄器を使用する祭祀を共有する集団の所在地や、その供給地が諸県地域にあった可能性を示す一例として考えたい。

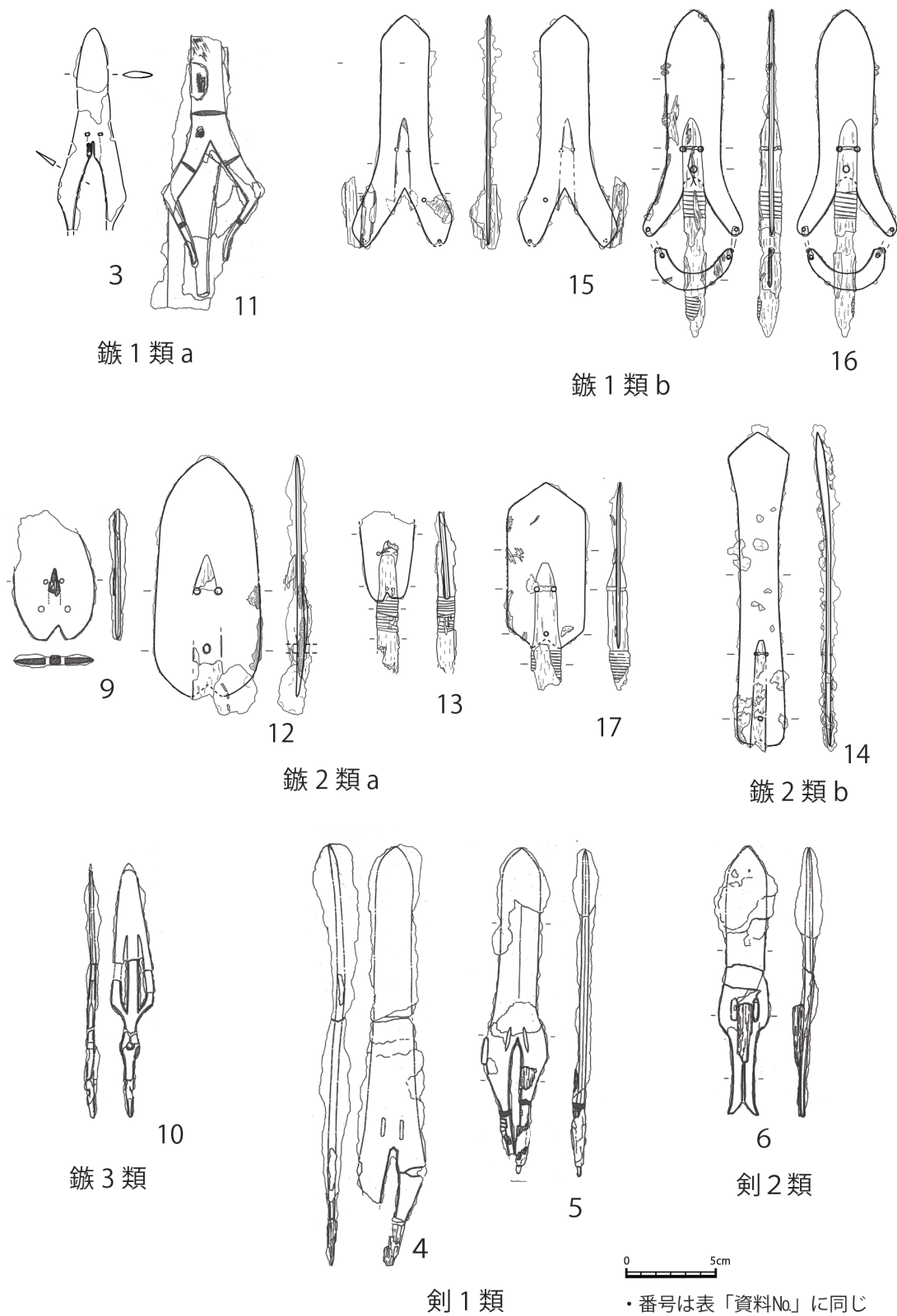


図3 異形鉄器の分類

(註)

- (1) 矢柄との接続方法の違いによるものと考えられる。なお、町田堀遺跡出土例は矢柄部に弧状の鉄片をはさみ、本体と紐状のもので接続するという極めて特異なものであり、大窪第1遺跡出土例を同じものとするには躊躇を覚えざるを得ない。今後、類例が増加すれば分類の再整理は必須の作業となる。
- (2) 橋本は、「古墳社会とは一定の隔たりをもったネットワークの中で生産され、流通しているようで、九州南部、とくに大隅・薩摩地域を中心に独自に発展した鉄器として捉えられる。」(橋本2014 p7 1.37-44)と指摘している。

参考文献

(論文等)

- 乙益重隆 1974 「成川遺跡の鉄器・鉄製品について」『成川遺跡』文化庁埋蔵文化財発掘調査報告7
- 新屋敷久美子 2015 「古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土鉄器についての一考察」『研究紀要・年報 縄文の森から』第8号
- 橋本達也 2003 「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会
- 橋本達也・藤井大祐 2007 『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也・編 2014 『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島大学総合研究博物館

(報告書等)

- 鹿児島県教育委員会・広域財団法人鹿児島県鹿児島文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016 『町田堀遺跡 第二分冊』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(7)
- 文化庁 1974 『成川遺跡』文化庁埋蔵文化財発掘調査報告7
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016 『大窪第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第238集

図出典

- 1～3 和田実測・トレース 4～6・9～11 橋本・藤井 2007 より転載、一部改編 12～17 鹿児島県教育委員会・広域財団法人鹿児島県鹿児島文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016 より転載、一部改編

執筆者一覧（掲載順）

加藤 徹 (KATO Itaru)	宮崎県埋蔵文化財センター
菅付 和樹 (SUGATUKE Kazuki)	宮崎県埋蔵文化財センター
遠部 慎 (ONBE Shin)	久万高原町教育委員会
宮田 佳樹 (MIYATA Yoshiki)	金沢大学環日本海域環境研究センター
吉本 正典 (YOSHIMOTO Masanori)	宮崎県埋蔵文化財センター
和田 理啓 (WADA Masahiro)	宮崎県埋蔵文化財センター

投稿規定

- 1 投稿できるのは、宮崎県埋蔵文化財センター職員及び紀要編集担当が認める者とする。
- 2 投稿原稿は、当該年度の紀要編集担当が定める期日までに提出する。紀要編集担当が指名する匿名査読者の査読を経たうえで掲載する。
- 3 原稿は宮崎県の埋蔵文化財および関連する諸分野に関する論文、研究ノート、資料紹介とする。既発表のものは受理しない。
- 4 一編当たりの分量は20頁以内とし、一人一件を原則とする。
- 5 執筆要項は次の通りである。

版面（キャプション含）は幅155mm、高さ240mmで、本文の文字は明朝10pt、1頁当たり43字×40行とする。註・参考文献は9ptで、文末に註と参考文献に分けてまとめる。本文中の註は、文字右上に(1)のように表記する。文末の参考文献は著者・発行年・「表題」『出典』・発行機関・掲載頁の順とする。

宮崎県埋蔵文化財センター

研究紀要

第4集

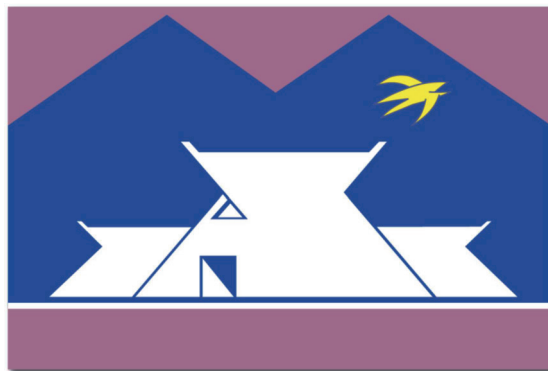
2017年4月

編集・発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985-36-1171・1172 FAX 0985-72-0660

Research Bulletin
of
Miyazaki Prefectural Archaeological Centre
vol.4



2017.4

Miyazaki Prefectural Archaeological Centre